

会 議 録

会議名 (審議会等名)		第3期第6回相模原市中央区区民会議(相模原市中央区拡大区民会議) 開会、第1部 基調講演			
事務局 (担当課)		中央区役所区政策課 電話042-769-9802(直通)			
開催日時		平成27年11月15日(日) 13時00分~14時05分			
開催場所		相模原市民会館 第1大会議室			
出席者	委員	20人(別紙のとおり)			
	その他	60人(一般参加者)			
	事務局	14人(中央区長、副区長、他12人)			
公開の可否	可	不可	一部不可	傍聴者数	-
公開不可・一部不可の場合は、その理由					
会議次第	<p><u>開会</u></p> <p><u>第1部 基調講演</u></p> <p>第2部 分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1分科会 若い世代の地域参加について ・第2分科会 学生の地域参加について ・第3分科会 子ども、子育てを通じた地域参加について <p>第3部 全体会</p> <p>閉会</p>				

開 会

中央区長あいさつ

(要旨)

- ・区民会議委員をはじめ、本日までご参加の皆様におかれましては、日ごろから市政並びに区政の推進に大変お力をいただき、厚く御礼申し上げます。
- ・区民会議は、区民主体のまちづくりを進める基本的な仕組みでございまして、中央区区ビジョンの推進に向け、区のまちづくりの方向性などについて協議する場といたしまして、区民会議委員の皆様には大変熱心にご議論をいただいております。
- ・現在、人口減少社会が到来し、地域を取り巻く環境が変化をしております。中央区の人口は増加傾向にございますが、各地域とも少子高齢化や地域コミュニティの希薄化を背景としまして、地域活動の中心となる自治会加入率は低下をしております。また、地域活動の担い手が固定化し、新たな参加者を確保することが難しい状況が地域の共通の課題になっております。
- ・一方、地域防災、子育て環境の確保、高齢者の見守り支援といった、地域に根ざした活動に対する社会的な要請が高まっており、その取り組みを一層進めていくため、本日のテーマを「若い世代の地域活動、まちづくりへの参加」とさせていただきました。
- ・「若者の地域参加」は、古くて新しい問題で、なかなか魔法のつえを使うように簡単に結論は出ないと思っておりますが、皆様で課題の共有化を図っていただきまして、少しでも解決に向けました糸口が見つかればと思っております。
- ・本日の会議が皆様にとりましても有意義な時間となり、地域の活性化が進み、そして区民主体のまちづくりが一層進む機会となればと思っております。

井狩中央区区民会議会長あいさつ

(要旨)

- ・「少子高齢化社会」は、我が国全体が抱える大きな課題であり、県や市の区域での議論も必要ですが、我々の足元となる区の単位で、身近な地域の皆様と地域の課題や夢を共有したいという願いを込め、「若い世代の地域活動、まちづくりへの参加」とさせていただきました。
- ・現在文部科学省が大学に求めているものは大きく2つあり、1つは世界に通用する人材

養成、そしてもう1つが地域に根ざした人材養成であります。

- ・今回は、多くの参加者が発言できるよう、分科会という形式を採用しました。地域で活動する学生や担い手の発言や意見交換は、今後の中央区の方向性をつくるきっかけになることのみならず、人材養成の一助になることを期待しております。
- ・「若さ」というものは、遠く、新しく、未知のものに引かれることを、大人たちは承知しております。地域活動には「近いけれど新しく、未知の魅力がある」というメッセージを、若い世代の心に届くよう、担い手の皆様から語りかけていただきたいと思っております。

第1部 基調講演

講演者 首都大学東京都市教養学部都市政策コース教授 和田 清美さん

テーマ 地域活動、まちづくりへの課題 - 若者世代・学生・子育て世代 -

(講演要旨)

本日は、限られた時間でございますが、分科会に向けてのテーマ、課題群ということでお話をさせていただきます。

さて、私は、都市社会学、社会学、特にコミュニティやまちづくり活動について、長く研究してきております。

そこで、地域活動やまちづくりに関する歴史的な展開を交え、その現状と課題についてお話ししていきたいと思っております。

都市成熟化時代における地域活動・まちづくりへの期待

今、我が国は大変な社会変動に見舞われております。1990年代ごろ、地域社会の変動のあり方について、「グローカリズム」という造語が都市の研究の領域でよく使われました。しかし、現代社会においては、グローバル化が進んでいる一方、東日本大震災によって、ますます地域の大事さが問われている段階であり、そのような変化を都市成熟化時代と呼んでいます。そこで、都市成熟化時代における地域活動、まちづくりへの期待についてお話しします。

社会環境の変化については、高度経済成長、そしてそれと随伴する形での急激な都市化の進行が20世紀の後半に起こりました。そして、21世紀の初頭では、急激な都市化が

一段落し、都市へ人口が定着をしていく都市型社会へと入っていき、人口減少、少子高齢化といった幾重にもなる変化がありました。このことを都市成熟化といいます。

地方創生というキーワードにも表れるように、まさに人口減少時代の中で、それぞれの地域における創生のあり方が問われており、各自治体は、その人口ビジョンをはじめ、計画づくりに取り組んでいます。

相模原市の場合は、平成31年、あと4年後には減少の段階に入っていくことが予測されているとのことですが、このような環境の中で、地域活動、まちづくりをどのように考えればよいのかということになります。地域活動というのは、地域に基盤があって、その住民、市民が活動を展開することとなりますので、基盤そのものである人口の構造が変化すれば、当然、地域社会の課題も変わりますし、何よりも担い手が変わっていきます。

都市成熟化というと、総人口や年少者の減少や高齢化によって地域が徐々に衰退化していくというのではないかという議論もありました。しかし、現在は、そのような人口構造の変更の中で、いかにそれを逆手にとって衰退化を回避し、文字どおりの成熟化した地域社会を実現していくかという段階にあります。だからこそ、地域活動やまちづくりへの期待が広がっているのです。

次に、なぜ現段階になってこれだけ地域活動やまちづくりに期待が寄せられているのかということを考える必要がありますので、その意義について少し歴史を振り返りながらお話しします。

コミュニティ形成・まちづくりの意義と課題

皆様は、それぞれの地域で暮らし、仕事をし、余暇活動を行っているかと思います。

地域活動、まちづくりによって成り立つ地域社会とは、風土、歴史、産業、文化といった各要素から構成される、人間の共同生活の場であります。つまり、地域のさまざまな資源に支えられて、共同生活をしている場所であることがポイントとなります。したがって、地域活動やまちづくりというのは、共同生活の場、例えば活動の舞台である地域社会に対して、住民が主体的、積極的に参加、関与していく過程であるといえます。

戦後70年の過程の中で、住民、市民あるいは国民が、主体的に何かに関与していくことができる社会的、経済的な条件が備わりましたが、そのピークは、高度経済成長期でありました。公害問題をはじめとして、さまざまな社会問題が生み出されました。しかし、それに対する市民や住民の異議申し立てをはじめとした、さまざまな運動や活動が展開さ

れました。そこで大切なことは、地域の課題に対し、住民が主体的かつ積極的に関与できることそのものが、高度経済成長期の一番の遺産、あるいは教訓であり、現在の地域活動に対する礎になっているのです。

70年代のオイルショック以降、全国的に、特に地方において「まちづくり・むらづくり運動」というものが活発に展開しました。これは、住民自らが主体的に地域に関わること、今の言葉でいうと活性化、あるいは創生といった活動に、地域の資源に根ざした活動です。そこで思想もしくは基盤となったものが、「地域主義」や「地方の時代」といった言葉です。

一方、都市の場合は、地方から多くの人々が労働者として流入し、居住の場所を求めて新しい住宅開発が進められ、そこに住民たちが転入しました。そのような中で、リーダーの養成や住民によるまちづくりに関する会議といった、地域コミュニティに市民が直接参加する「コミュニティ行政」が始まっていきます。

80年代に入ると、「コミュニティ行政」の効果から、「ネットワーク・ボランタリーアソシエーション」という、より大きな広がりを持つボランタリーな活動が起こります。

90年代といえば、皆様ご承知のとおり、阪神淡路大震災が大変なインパクトを与えました。具体的には、ボランティアや市民活動の変化、そして現在のNPO法人に関する法律ができました。また、町内会や自治会といった地域のあり方への見直しが一気に展開していき、「コミュニティ」から「地域」という言葉が使われる変化が生じました。

2000年代に入ると、災害やさまざまな要因を受け、「地域コミュニティ」という言葉が行政においても取り上げられ、東日本大震災によって、その再評価、見直しがあり、現在に至っております。

2009年に総務省が作成した「新しいコミュニティのあり方に関する研究会報告書」の中に「地域協働体と地域自治区の連携」という図があります。「地域協働体」には、自治会、ボランティア団体、各種まちづくり団体やNPO等、住民が参加する地域のさまざまな主体が、地域づくり、まちづくりを実行しています。見方を変えれば、公共サービスを提供しているともいうことができます。なぜなら、そのような団体の活動は、市民あるいは住民に還元される活動、まさに公共性を持った活動であり、公共サービスであるからです。

もしこれが行政の名で提供したならば、行政サービスとなりますが、このような読み替えをこの報告書において提言されているのが特徴的です。また、ここで理解していただき

たいことは、さまざまな諸集団が公共性を持った活動を展開していること、それ自体が戦後の到達点であるということです。

しかし、一方で、さまざまな課題を抱えているのも現実でありますので、大きく3点にまとめてみました。1つ目に、担い手・人材の発掘と参加の機会の提供です。2つ目に、分科会でも議論されるかと思いますが、団体活動の育成と活性化です。3つ目に、多様な担い手・団体の「協働」の仕組みづくりとリーダーの役割です。ここでは「協働」という言葉を使っていますが、現状では個別的に孤立的に活動している担い手をどのようにつないでいくかという点が重要となってきます。つながれば情報交換もなされますし、共通の課題があれば、その課題に向けた勉強会などの情報交換もできますし、団体間での連携や協働が進めば、より大きな力となっていきます。

そのためには、個人や団体間をつなげられる「コミュニティ・コーディネーター」の存在が重要であるといわれております。

若者世代を含む広い意味での人材をどう発掘し、参加の機会を与えていくか、また機会を提供していくためには、「コミュニティ・リーダー」となりうる皆様が、どのように仕掛けづくりや工夫をしていくのかということが重い課題であります。

地域活動・まちづくり活動と担い手の現在 - 若者、学生、子育て世代に注目して -
「地域活動・まちづくりの現場報告」として、私の研究室で行った調査結果を交え、若者、学生、子育て世代に注目しつつ進めていきます。

1つ目の事例は、2008年に実施した、町会・自治会調査です。東京都世田谷区、墨田区、八王子市の自治会長を対象にアンケートを実施し、回答率6割、約900サンプル収集という結果でした。

自治会加入率については、役員の高齢化・固定化に悩みながらも、世田谷区が66%、墨田区、八王子市は80%を超える率を維持しておりました。また、NPOやボランティアといった新しいタイプの地域組織と自治会組織の連携は相対的に弱く、行政につながるような諸団体との関係、ネットワークが強い傾向にあるということがわかりました。

また、従前より実施されてきた活動は維持され、近年の傾向である、防災、防犯、子どもに対する活動には積極的な役割を果たしており、自治会の内部で新しい団体が組織され、あるいは派生して組織された団体と連携を取っていることがわかりました。

2つ目の事例は、2012年に実施した、NPO・ボランティア団体の実態と担い手に

関する調査で、西東京市のNPOやボランティア団体への質問票の配布及びインタビューを実施しました。

団体構成員の年齢層は、50代、60代以上の高齢世代で構成された団体が多いものの、40代以下の中・若年世代、少数ではありますが、10代や20代も参加しておりました。

性別は、「男性の割合が10%未満の団体」が26.1%、「男性の割合が30%から40%未満の団体」が18.3%でしたので、男性の団体参加は女性ほど活発でない傾向でした。

若年者比率は、10代から40代を若年者とし、その世代が会員にいない「若年者比率が0%」の団体が全体の41.8%を占めたことから、若年者の参加の少なさが浮き彫りとなりました。

活動内容は、「子育て・男女協働」といった領域が上位で、次に「環境保全」の領域でした。また、「交流・レクリエーション」、「障害者支援」、「高齢者・医療・福祉」の領域を加えると、全体の9割が5つの領域で占められておりました。

団体が抱える課題は、「メンバーの固定化・高齢化、若年者や特定技術の持つ新しいメンバーが欲しい」という項目が半数以上を超えており、人材の問題、特に若者の問題が指摘されておりました。

団体リーダーや代表者に対し、最初に活動を始めたのは何歳かという「団体参加年齢」に関する設問は、注目すべきことに、10代から30代までに最初に参加した方が約2割おりましたので、若年者の団体参加の可能性がゼロではないことが重要です。

代表者にとっての活動理由は、社会とのつながり、自己充足、貢献を挙げておりました。

調査結果の概要は以上ですが、今回の調査に参加した、地域活動に大変関心を持っている学生が印象的なレポートを書いておりますので、ここで紹介します。

その学生は、「求心的と遠心的」という言葉を用いて若者の地域活動に関する課題を表現しております。「求心的」とは、ある程度地域が特定化された活動のあり方で、「遠心的」とは、特定の地域というよりも、外へ向くという活動のあり方です。なぜ遠心的な団体に若者が多いのかは今後も検討を要するが、活動範囲が広い団体が若者を引きつけるのかもしれないし、インターネットや独自開発による広報活動が若者の間での団体活動の知名度を高めるかもしれないと指摘しております。

また、コミュニティや地域活動においても、従来の狭い地域での活動ではなく、空間に限定されないインターネット等でつながる広がりもコミュニティなのではないかと指摘しております。

その学生は、なぜ若者は地域活動に参加しないのだろうかという前提でこの調査に臨んだのですが、若者だけで構成している団体に出会った結果、若者にとって興味のある課題、子育てというような身近な問題、話題性のある社会問題を活動内容にする必要があることを実感したそうです。その学生の言葉では、「団体活動は自分の問題を自分で解決したい人」と表現し、主体的に何かの問題を発見して、そこにかかわっていくことが、地域活動の原点だということ指摘しています。その学生は、興味のある分野でなければ熱心な活動ができないという、とても当たり前のことかもしれませんが、その答えにたどり着いたことそのものが凄いなと思いました。

そして、高齢者の団体は若者を必要とし、若者はノウハウがほしいということをつなげていくかということが課題であることを指摘しています。つまり、今の団体の年齢構成で目的にかなう活動がなし遂げられていけば、無理に若い人を入れたり、高齢者を追い出したりする必要もないだろうと書かれておりました。

今回講演に当たりまして、もう一度いろいろ資料を読み漁ったところ、この学生のレポートを見つけました。素朴な意見ではありますが、大変重要な提言が数多くありましたので紹介させていただきました。

おわりに - 分科会に向けて -

事務局より相模原市の市民活動に関する資料を送っていただきましたので、感想を加えながらご紹介します。

さがみはら市民活動サポートセンターの資料によりますと、中央区のNPO法人数は、他区と比べて少ないが、NPO法人を含む全ての登録団体と比較すると、中央区に所在を置く団体が約半数というデータがありました。登録団体が多いということは、法人格に関わらず、地域活動が活発であるということです。

また、中央区の地域活性化事業交付金の活動報告書によりますと、若者が興味を持ってそのような活動事例が数多くありました。今後は、高齢者や子育て世代の活動が相互に成果をつなげ、補っていくことが大事なのではないかと思えます。

私は、相模原市市民協働推進審議会委員として基本計画の検討に参加しており、いろいろな活動提言をさせていただきましたが、中央区においては、地域活性化の活動を地道にされており、活動の広がりに関する可能性を感じました。

若者の地域活動の参加については、全国的な課題です。これまでの活動をもとに、さま

ざまな試行錯誤を経て、相模原市中央区型の活性化モデルのような仕組みができることを期待しております。

また、分科会での実りある討論となることを期待して、終わりにしたいと思います。

(質疑)

主な内容は次のとおり。(質問者の発言 基調講演者の発言)

若者を積極的に活用して、若者の意見が反映されている地域活動をしている事例がありますか。自分が若いときには仕事一筋であったため、地域活動に参加したくても参加できないですし、生活するためには仕事のほうが大事だという価値観を持っていました。今の若者も、当時の私と同じ状況にあると思ったため、質問しました。

世田谷区で行った、防災・防犯・環境・景観という4つの活動をしている団体について調査した結果をご紹介します。環境・景観系の団体は、既存の自治会組織に比べると年齢層が若いと言われております。そういった活動に参加される方は、テーマに関心があるからこそ、仕事など多忙な中、少ない時間でも活動を行っているとのことでした。

自治会組織が日頃行っている活動の内容については承知しておりますが、その中に若者向けといったテーマを入れておくことも大事かと思えますし、地域活性化事業交付金の活動内容についても、若者受けするものがあると思えます。

また、本日は、参加者に学生や若い世代も参加しておりますので、率直な意見を引き出していただけたらと思っております。

第3期第6回相模原市中央区区民会議 委員出欠席名簿

	氏名	所属等	備考	出欠席
1	井狩 芳子	学識経験者（和泉短期大学）	会長	出席
2	石井 トシ子	相模原市公民館連絡協議会中央区ブロック		出席
3	井上 政市	相模原交通安全協会		欠席
4	浦上 裕史	一般社団法人相模原市観光協会		出席
5	河本 博	大野北地区まちづくり会議		出席
6	木内 哲也	一般社団法人相模原市医師会		出席
7	木村 清	横山地区まちづくり会議		出席
8	坂本 洋三	相模原市地区社会福祉協議会連絡協議会中央区連絡会		欠席
9	佐々木 亮一	公益社団法人相模原青年会議所		出席
10	清水 洋子	相模原市私立保育園園長会		出席
11	代田 昭	中央地区まちづくり会議		出席
12	関戸 丈夫	田名地区まちづくり会議		出席
13	武井 弘吉	小山地区まちづくり会議		出席
14	竹田 幹夫	星が丘地区まちづくり会議		出席
15	田代 明寛	清新地区まちづくり会議		出席
16	田所 昌訓	相模原市自治会連合会	副会長	出席
17	千葉 更男	公募委員		欠席
18	永井 廣子	相模原市立小中学校PTA連絡協議会		出席
19	中西 豊和	相模原市民生委員児童委員協議会		出席
20	長谷川 光義	上溝地区まちづくり会議		欠席
21	久松 伸	学識経験者（麻布大学）		出席
22	平林 清	光が丘地区まちづくり会議		出席
23	本郷 永子	公募委員		欠席
24	宮津 敏信	公募委員		出席
25	横山 房男	相模原商工会議所		出席

会 議 録

会議名 (審議会等名)		第3期第6回相模原市中央区区民会議(相模原市中央区拡大区民会議) 第1分科会 「若い世代の地域参加について」				
事務局 (担当課)		中央区役所区政策課 電話042-769-9802(直通)				
開催日時		平成27年11月15日(日) 14時10分～15時23分				
開催場所		相模原市民会館 第2小会議室				
出席者	委員	7人(別紙のとおり)				
	その他	16人(一般参加者)				
	事務局	3人				
公開の可否		可	不可	一部不可	傍聴者数	-
公開不可・一部不可の場合は、その理由						
分科会次第		<ol style="list-style-type: none"> 1 開会、分科会テーマの確認 2 取組事例の発表 3 討論、意見交換 4 まとめ 				

主な内容は次のとおり。

【第1分科会コーディネーター】

石井 トシ子さん（中央区区民会議委員 相模原市公民館連絡協議会委員）

1 開会、分科会テーマの確認（コーディネーター）

まず、分科会のテーマについて確認をさせていただきます。現在の地域の担い手から見た若い世代の地域参加、若い世代が地域活動に関心を持ち、地域活動に参加して担い手となるための必要な取り組みについて、お話を進めていきます。

仕事をもち、家と職場の往復を中心とする生活の若い世代は、地域への関心が低く、地域とのかかわりが乏しいという大きな課題がありますが、そのようなことについて議論していきたいと思います。

では、取組事例として、光が丘地区社会福祉協議会と、にこにこ星ふちのべ商店街の活動について発表をお願いしたいと思います。

2 取組事例の発表

（1）若者世代の地域活動への参加促進

私は、光が丘地区社会福祉協議会理事、福祉の里づくり推進委員会の副委員長としております。地域の若い世代が担い手として参加するためには、若い世代が自由に活躍できる場があること、隠れた人材を発見できる仕組みがあること、子どものときから地域になじめた経験を持っていることが非常に大事ではないかと思っております。

若者世代の地域活動について、光が丘地区では大きく3つの特徴があります。

第1に、青少年に関わる事業について顕著ですが、PTA、子ども会の役員といった方がリーダーとして活躍する場面がかなり多くなっています。

第2に、地域活性化事業交付金の対象事業ともなりました、地区での人材登録制度について取り組んでおります。

第3に、青少年が地域のイベントにボランティアとして参加してもらうため、さまざまな取り組みを行っています。本日は、この部分に絞ってお話します。

光が丘地区の特徴は、65歳以上の老年人口率が相模原市全体で2番目に高く、年1%以上の割合で上昇しており、地域の中で若者が登場する仕組みをつくらなければならないと危機感を抱きました。そこで、平成22年より、地域活性化事業交付金を

活用して、若者世代の地域活動への参加促進事業を推進しました。

また、地区自治会連合会、2つの公民館、地区社会福祉協議会、民生委員児童委員連絡協議会といった団体が、まちづくり会議等で日ごろから非常に緊密な連携を取っております。その実績として、地区で開催される大きなイベントである、「ふるさとまつり」や「ふれあい・いきいきフェスタ」において、安全防犯、青少年、老人会、PTA、学校関連、保健福祉施設、ふれあいセンターなどの団体が連携した運営ができるようになりました。

次に、学校との連携事例についてお話しします。2004年頃から、緑が丘中学校と地区社会福祉協議会が連携し、地域在住の障害者のいろいろな社会参加の機会をつくる活動に生徒が参加する活動が始まりました。現在は、「子育てほっとサロン」や「赤ちゃん救命救急」における子守体験といった地区社会福祉協議会の事業に参加するまでに発展し、継続した関係が保たれています。

このような地域資源を背景とし、地区社会福祉協議会とその傘下にある「光が丘福祉の里づくり推進委員会」が主体となり、光が丘地区と近隣の中学校、高等学校の生徒、大学生といった若年層が地域の活動に気軽に参加できる「若者サポート隊」という事業を推進しています。

その仕組みは、地域の各種団体から人数や、若者にやってほしい内容など、具体的なニーズをくみ上げ、地区社会福祉協議会が学校へ派遣依頼します。学校側は、参加者名簿によって回答してもらい、地域の団体と学生・生徒を引き合わせ、実際に参加していただきます。なお、地区社会福祉協議会が学校側へ依頼したい自主財源確保のイベントにも同じ仕組みで参加をお願いしています。

参加した学生・生徒には、手帳サイズの「ボランティアハンドブック」を配布し、感想等を書いてもらい、地区社会福祉協議会が年間を通した活動記録をまとめ、派遣していただいた学校へ情報提供し、今後の参考にさせていただく流れとなっています。

学生、生徒からの感想を紹介しますと、話しかけにくかったお年寄りとも会話することができたといった世代間の交流や、新しい体験による達成感があったといったことが書かれておりました。

また、派遣した学校からは、子どもたちが責任を持って役割をはたしてくれると思わなかった、我々が思うより子どもたちはしっかりしている、学校の教育スローガンに通じているといった感想をいただいております。

派遣を受けた団体やイベントの参加者からは、若い人が真面目に取り組んでくれておりとても新鮮な感動を覚えた、若い人がいるだけで何となく元気になったというお年寄りからの感想をいただき、非常にプラスの効果があったと思っております。

今後の課題としては、学生・生徒だった子どもたちが成長した後も、地域との関わりを持ち続けられるようなフォローをしたいと思っています。大人になっても地域の活動に参加してくれれば、「ああ、あのときの君だったのか」といった話が数多く生まれてくるのではないかと楽しみにしております。

(2)「にこにこ星ふちのべ商店街での活動」

私は、淵野辺駅の北口で居酒屋を経営しております。仕事や商店街での活動で学生と交流がありますので、このような機会をいただきました。

まず、淵野辺のまちの雰囲気についてお話しします。市外から訪れた当初から、まちの皆様がとても温かいことが印象的でした。ふらっと入った居酒屋でも、互いに名前も知らない方、大学の先生ではないかと思われる方でも気軽にお話しすることができ、お店で再会すると、お久しぶりといった感じで会話が弾みました。そうしたことがきっかけで、淵野辺で居酒屋を経営するに至りました。

また、ふちのべ星援隊というボランティアや地元幼稚園のおやじの会など、淵野辺を盛り上げようという熱い気持ちを持った人たち、声をかければ集まってくれる仲間がたくさんいて、この地域と関わっていこう、温かく人を迎えようという雰囲気を感じることができます。

次に、今日のテーマである若い世代の地域活動への参加についてお話しさせていただきます。居酒屋を経営しておりますので、学生などの若い世代をアルバイトに雇うことがあります。その子たちを使う感覚は持っていません。作業として一通りのことは教えますが、信頼しているパートナーであること、失敗を受けとめることを心がけています。すると、自分たちで考え、どんどん行動できるようになります。「構成力」とでもいいでしょうか、そういったものがアルバイトの学生たちの身につきます。イベントのお手伝いを学生さんをお願いする場面においても、学生が前面に出て大人がサポートに回る運営に結びつけばとよいと思っています。

ご存じのとおり、淵野辺周辺は、多くの学生と交流を持てるチャンスがたくさんあり、とても恵まれています。大野北銀河まつりを代表に、さまざまなイベントで学生さんと一緒に活動していますが、日ごろから心がけている、世代を超えた信頼関係がとても役立っていると思います。

参加する学生は正直ですから、態度や気持ちで示さなければすぐに見破られてしまいます。心の底から信頼していることを伝え、心が通じ合えば、親子ぐらい違う子であってもあだ名で呼び合えるような深いつながりを持つことができます。例えば、ある学生は、大学を卒業した後に親を連れてきて、私のことを淵野辺のお父さんと紹介

してくれたときは、本当に今まで活動してきてよかったと思いました。

最後に、淵野辺の活性化と今後の活動についてお話しします。淵野辺は「JAXA」や「はやぶさ」を通じて、宇宙というテーマで人が集まるきっかけを持つことができました。中央区の目指す将来像である「人とまち、宇宙をつなぐ中央区」をまさに体現できたと思います。

JAXAにお勤めの教授からいただいた一言がきっかけで私のお店のメニューにした「はやぶさ丼」は、新聞やテレビなどに取り上げてもらいました。しかし、単なるイベントや、はやぶさにちなんだものだけでは、どうしても一時的なブームになってしまうと感じています。また、アルバイトの学生であればよく顔を合わせるので信頼関係が強くなりますが、イベントスタッフの学生さんは、顔と名前が全て一致するにはなかなか難しいものであります。また、イベントを無事に終わると、熱が冷めてしまうこともあります。

そこで、大学生に限らず、小学校からの親の世代まで幅広い若い世代の方と年間を通じた活動をして、少しずつ顔と顔が見える関係をつくる活動を考えています。例えば、中央区内の畑を借りて、種まきから草刈り、収穫まで地元の人たちの手を年間通じて同じ仲間と作物を育てます。そして、その作物で芋煮会や、とれたて野菜を地域イベントで販売ができるといった、淵野辺らしさ、相模原らしさを伝える企画です。その集大成として、大野北銀河まつりなどの大きなイベントにおいて、自分たちのつくった野菜から「JAXA」や「はやぶさ」にちなんだ料理を出店すればおもしろいと思っています。

最後になりますが、来年2月の淵野辺ちよい呑みフェスティバルでは、実行委員長をしますので、お世話になっている淵野辺に少しでも役立てればと思っています。また、先日、藤沢の商店街の方と話す機会がありましたので、他の地域の成功例なども取り入れながら、これからも活気のある淵野辺にしていきたいと思っています。

3 討論、意見交換

(発言内容： コーディネーター 事例発表者 区民会議委員 一般参加者)

事例発表者の皆様、ありがとうございました。

では、光が丘地区社会福祉協議会の事例について、最後に課題として挙げられていた、地域活動に参加した子どもたちへのフォローをすることについて、若いうちから地域の担い手として顔が見えていれば、成長したのちに帰っていきやすい場所となると思いますが、何か考えているようなことはありますか。

先ほど申し上げたとおり、フォローの方法が課題です。しかし、それがうまくいけば、数年後、青年になって、またふらりと地域の活動などに現れてくれるのではと期待しています。

現在の活動においても、顔と名前は地域のどなたかが知っている関係を築きつつありますので、うまく青年期の地域活動へつながっていくのではないかと考えています。

皆様の地域においても、小学校、中学校のときからいろいろなイベントに参加してくれていると、「え、もう高校生になったの」「いや、大学生だよ」といった会話ができる若い世代がいるのではないかと思います。若い世代が地域の中に入っていくということは、地域の人がきっと声をかけてくれる、知ってくれていることが大きな安心のポイントになるのではないかと考えています。皆様の中で、事例紹介があればお願いします。

小山地区の私の自治会は、世帯数が300戸未満の中小の自治会ですが、青年部に頑張ってもらったことが大きく、地区の運動会では、総合1位、2位を数年続けています。また、子ども会など、地域に関係する団体に対し、自治会のイベントに参加をお願いすることがありますが、最初のお願いと終わった後のフォローが重要だと思っています。

フォローの内容として、運動会であれば飲み会になってしまうのですが、そのようなことを通じてお互いを知ることができますので、必要なことであると思っています。自治会側は、お願いばかりではなく、終わった後の対応をしなければならないと思っています。

依頼をしたら、最後にフォローをする。そのことがきっと次につながりますね。光が丘の事例において、参加した子どもたちや送り出した学校の感想にありましたように、参加することで地域からとても感謝されたといった経験は、子どもたちが成長した後も地域の中に入ってこられる、居場所があると感じるようになると思います。行事が終われば、大人の場合は飲み会で、子どもは飲み会ができませんので、ありがとうといった感謝の言葉、頑張ってくれたねというねぎらいの言葉をかけることが大事であると思います。

光が丘地区では、子どもたちへのフォローの1つとして、ボランティアの参加履歴を生かして、その子どもたちが中学校を卒業する時、本当に簡単なものですが、感謝の記念品を渡し、ほかの同級生から、「何かいいことをやったの」といった雰囲気で見てもらえるといった取り組みを行っています。

にこにこ星ふちのべ商店街の事例について、私も大野北地区在住ですので、最近とてもよくなったと身近に感じています。それはボランティアの団体が淵野辺だけでは

なく、いろいろなところから人を集められて、まさしく各団体と共同して活動をやられております。とても価値のある取り組みですので、このまま是非続けていただきたいと思っております。

若者が活躍できるように配慮していることで、大人が信頼し、失敗を受けとめること。そして、学生たちが考える、構成力が身につけられるといった大人のサポートによって学生の力が発揮できるとおっしゃっていました。

また、淵野辺の周辺は大学との地域連携が盛んですので、他の地域ではとてもうらやましいと感じているのではないかと思います。

ところで、淵野辺の温かさについて、具体的にどのようにお感じになりましたか。

うまく説明できませんが、フレンドリーですね。例えば、商売をはじめた時もすぐ歓迎してくれ、熱い人が多いと感じました。

にこにこ星ふちのべ商店街は、中央区安全・安心と夢・希望のプロジェクトにおいて、イルミネーション大賞を受けられるなど、とても熱気があります。地域を活性化させる商店街において、若者世代に入り込むイベントの仕掛け人として、この後もいい知恵をいただけるのではないかと思います。

では、テーマ全体の討論へ移ります。本日は、いろいろな地域の担い手の方がご出席かと思っておりますので、取組事例がありましたら発表していただけないでしょうか。

小山地区の子ども会の減少と現在の取り組みについてお話しします。現在、9つの自治会に対して、子ども会が5つに減少しました。そこで、子ども会の会長は親世代だけではなく、祖父母世代でもよいと規則を変え、私自身も一昨年、昨年と会長をつとめました。

大野北地区で去年まで自治会長をしていた者です。4年半前、はじめて会長を引き受けて始めたとき、残念なことに次々と退会する人がいまして、必死になって引きとめました。一度退会すると申し出があると説得できませんでした。そこで、退会の理由を尋ねると、子ども会でも同じ話を聞くのですが、次に役員の順番が回ってきたときにそれを断ると他の方に迷惑をかけてしまう、自治会が何をやっているかわからないという回答でした。

そこで、活動の内容を知らせる取り組みの一例として、東日本大震災時、相模原においても放射線が検出された場所があるということで、自治会で計測器を借りて調査し、問題なかったという結果を地域の人へ知らせ始めました。

自治会活動に参加したことがない人へ活動内容を知らせようと、1枚の紙程度ですが、1カ月に一度会報を回覧するなど、いろいろな活動をやってきました。

そのような取り組みの結果、その後3年間、退会される方はいなかったかと思いま

す。そこで、自治会活動に参加していない人に活動を知らせることが必要であると感じました。

続きまして、分科会開催前までにお出しいただいた、「参加者ご意見シート」の中から事例を紹介し、意見交換を行います。

例えば災害などが起きたときは、若い世代の定義を中学生まで下げる必要があるのではないかとの意見がありましたが、こちらの意見をお寄せいただいた方からご発言をお願いできますか。

上溝地区で商店会の会長を務めております。以前、防災講習会を公民館で実施した際、中学校へお誘いしたのですが、災害があったときに生徒を親に引き渡さなければならず、発災時に校外へ出さないという理由で断られてしまいました。

清新地区では、2つの中学校があるのですが、校長に相談したところ、地域の防災訓練等にも参加させますので、声かけてくださいということでした。地域の親世代は、お勤めが遠い方も非常に多く、災害が発生すれば、家庭ではお年寄りがいるぐらいになってしまいますので、日ごろより、避難所運営などで連携を取り、できる範囲で学校から協力を得ています。

光が丘地区で勉強会をしていたところ、中学生の防災活動について、大学の先生から取組事例を伺ったことがありますので紹介します。

子ども数名で1つの組をつくり、地域の高齢者の見守り担当を決め、平常時は、訪問して声かけなどを行い、災害時は安否確認ができるようにしているとのことでした。

中学生がどこまで活動できるかについては、これからの課題ですけれども、私たちの地域でもできないかと考えています。

私は、避難所運営協議会の役員をしています。中学生はとても戦力になりますから力を貸してほしいと思っておりますが、校長によって明らかに意見が違います。大前提として、学校は、災害時に生徒を保護者へ安全に引き渡す責任があります。だから、訓練であれば良いが、災害時は、絶対に校外へ出せないという方もおります。

ただ、東日本大震災の際、中学生が小学生の手を引いて津波から避難した事例がありました。中学生はまだ子どもですから絶対に危険なことをさせられないのが前提ですが、そのような事例がありましたので、災害が起きた際には、比較的安全な部分を手伝ってもらえるよう、行政から学校へ依頼してほしいと思っております。

次に、若い人の地域事業への参加促進について議論を進めていきます。世代間交流の仕掛けづくりについて、皆様の地域においても、老人会や子育てグループといった横のつながりがあまりないのではないのでしょうか。

例えばどのような仕掛けづくりをしたらよいか、まだ実施していなくても構いませ

るので、ご意見をお願いします。

東北地方だったと記憶していますが、地域がだんだん廃れていくのはなぜかを考える40代、まさに若い世代に関するテレビ番組がありました。町内会長など、年齢の高い人はあえて参加せず、地域の若い人だけに全て任せて、いろいろなことを考えさせたら、地域が活性化してきましたという事例でした。

基調講演でもありましたとおり、高齢者の視点で物事を考えるので、若い人が何をしたいのか理解していないのではないのでしょうか。若い人ですから、ときには失敗もあるでしょう。しかし、失敗を繰り返して育成していくという意味において、ある程度若い世代、例えば先ほどのテレビ番組のように50歳未満、そういう人たちの構成で事業を計画させたらどうかと思いました。

光が丘地区社会福祉協議会の事例において、子どもたちの意見を聞いたとありましたが、その中で、子どもたちがこんなことができたらいねといった、意見がありましたか。

区長が参加して、中学生がそれぞれの思いを話してもらう機会を設けたことがありました。その時にわかったこととして、中学生の意見は、学校というフィルターを通してしか発言していませんので、なんとなく実現しないと感じているということです。しかし、この時は、社会的発言といったら大げさですけれども、実際はこういうことがあったらいいなという地域に対する要望やお願いを区長へ直接話すことができたことを、とても感動しておりました。

内容は別にして、区長と直接話すことで社会への参加意識が非常に高まったのではないかと考えています。子どもたちの情報発信のチャンネルは、意外と限られていると感じました。

今の発言のように、若者世代や子どもたちの意見を聞く場をいかに設定できるかということが重要だと思います。日ごろから忙しくいろいろと地域の活動をしている人たちは、どちらかというと早くことを進めたいと考えてしまいます。

若者世代の力をもらうためには、じっくり意見を聞いて、できそうなことを任せってみるという姿勢が必要ではないかというご意見ですが、ほかにございますか。

若者という定義を30代、40代として話をさせていただきますが、子どもと一緒に連れてくるイベントをやりますと、親が必ずついてきてくれますね。その世代を参加者とする一つの方法として有効だと思います。

イベント参加者のお話ですね。参加者に若者世代を増やすためには、子ども中心のイベントをすれば、親や祖父母が来てくれます。では、商店会などでは、どのような工夫をされていますか。

西門の商店街では、NPO法人に子ども向けのイベント実施を依頼しています。この間もハロウィーンイベントを実施していただきました。今、商店街に若者がいないため、部外者の方に期待しております。

部外者というのはNPO法人などですね。基調講演にもありましたとおり、NPO法人はいろいろな活動をしているけれども、意外と地域とのつながりがいい。今、言われたように、NPO法人も子どもの教育などに取り組んでいる団体が多いのです。そのような団体をターゲットに地域のイベントに引き込むと、そこに若者の姿が見えてきて、自分の住んでいる地域をもう一度見直すことができる。そういったものも1つの取り組みの方法だと思います。

まず、何が目的で若者に参加してほしいのかと考え直す必要があると思います。小中学生に参加してほしい場合は、将来の種にしたり、肥やしをあげたり、子どもたちの動機づけをするという意味で非常に今でも必要だと思います。

田名地区の取り組みを紹介します。まず、中高生の場合、「ふれあい広場」という小学校の行事に70人ぐらいの中学生が参加しますし、中学校の体育祭では、高校から延べ25名程度参加してくれました。そのようなボランティア経験が、将来の種になると感じます。

また、30代から50代の場合、ある自治会では、役員を20名程度に増やし、そのうち会長と副会長以外の18名を40代から60代の各世代から選出しています。また、固定化しないよう任期を区切って、なるべく多くの方に役員を経験してもらう取り組みを行っています。ただ、実際にはそれも崩れてきて、40代から選出するのが難しくなっている状況です。

一方、自主防災隊に40代、50代が入っても、仕事などの都合で平日の昼間に活動ができません。実際に活動するのは、地域に残っている60代、70代となります。

公民館活動においても同じで、青少年指導員やスポーツ推進員、体育部員を選ぶのにも一苦労です。その場合は、文化祭などのときには、パネル運びや模擬店を手伝ってくれればお昼ご飯はあるからといった頼み方になってしまいます。

自分たちの現役時代を振り返りますと、常に地域にいるということはありません。とですし、自治会の役員に世代を決めてというのも難しいと思います。しかし、それも1つの方法であり、イベントの際は、ここだけ手伝ってくださいと明確に役割を決めることも有効かと思えます。

私も地域活動を始めたときはまだ30代でしたが、今は60代です。当時を振り返ると、男性の同世代の参加は少なかったです。現在よりももっと高齢者の男性が多かったのではないかと思います。

そのときに地域活動へ出てこられたのは、女性でした。女性をどう生かしていくかというのも、男性の力だと思います。そして、私が意識していることは、定年退職して地域に帰ってくる男性をしっかりと地域活動の担い手として捕まえることです。そして参加してくれたら必ず温かく迎えることです。1度でも来てくれたら、ありがとうとしっかり感謝の言葉を伝えています。

今、ここにいらっしゃる方は、どちらかというとも私も含めてちょっと高齢世代で、担い手やリーダーです。にこにこ星ふちのべ商店街の事例でもありましたが、若い人たちが来たときに、どんなことでもいいから役割を持ってもらう。そして、精いっぱい皆様から感謝の気持ちを伝えて、次にまた参加しやすいようにする。参加したときにはいつでも仲間意識を持って迎える。そうしているうちに、地域に戻ってきてくれるのではないかと考えています。

今までの議論は、若い世代が地域活動に入ってきてほしいという議論が中心でした。しかし、そもそも相模原青年会議所は、20代や30代で200人を超えるメンバーが地域活動をしておりませんが、実はあまり知られていないかと思っています。

僕らの世代は、その上の世代を誘っていません。逆に、自治会の方たちは、自分たちのフィールドに若い世代を引き込みたいということですが、難しいことだと思います。一方で、若い世代がグループをつくったら集まることをヒントにする必要があると思います。まず、若い世代が入っていき、ものを言える母体づくりについて議論することが必要ではないかと感じました。

私が青年会議所に入った動機は、生活するには仕事が大事ですから、それを中心としたつながりがほしいというものでした。これまでの議論を聞いていましたが、学生も同じかと思いますが、ボランティアと、まちづくりへの参画というものが、僕らの世代ではつながらないと思います。

ボランティアをしているのは、自発的に何か行動したいからボランティアをしているだけであり、それがまちづくりにつながっていることを、我々は全く意識していません。まちづくりとは何ですか、自治会のやっていることは何ですか、ということが全然わからないので、ボランティアに参加することと、自治会で活動することが結びつかないと思っています。

青年会議所も同じですが、若者に対しては、行っていることを知らせるよりも、いかにしてやりたいことを見つけ出せるかということに重点を置いたほうがよいと思います。自分でやりたいことが見つければ、責任感から参加する若い世代もいると思うので、そういった感覚を理解してもらえるとうれしいです。

青年会議所の皆さんの意見に賛成です。基本的に若い人たちは、例えばスポーツや

お祭などのイベントがあると、家族で参加してくれるのです。自分たちの興味のあることは参加するのです。しかし、まちづくりと言われてしまうと、どういうふうに参加していいか、きっかけがないのです。

一方、若い世代だけで地域において集まる機会があれば、自分たちの地域のことに関していろいろな話し合いができる可能性があると思っています。そこで私が提案したいのは、高齢世代の役員は一切入らないで、いわゆる若い人たちだけで地域のことについて話し合いをする機会を自治会が設けてみてはいかがでしょうか。

若い世代も地域のことに関心を持っているはずですが、ただ、そのようなきっかけをつくり、若い人同士が知り合いになれば、必ず何かいいことをやろうという話になると思います。

若い方から、本日の議論に関するご意見をお聞きしたい。

僕は地方から来て4年間しかいないのですが、にこにこ星ふちのべ商店街の方たちと関わりをもつようになり、大野北銀河まつりなど地域のお祭などに参加しています。きっかけがないと、大学生は、淵野辺のことを知らずに4年間過ごす人が多いのではないのでしょうか。商店街が大学生に向けて何かアプローチをすればするほど、地域のお祭りや、まちづくりに参加しやすい空気ができるのではないかと思いました。

最後に、中央区ビジョンに「人と宇宙をつなぐ中央区」という将来像があります。中央区、相模原市にはJAXAがあるのだということで、特にはやぶさが帰還したときからJAXAが中央区のシンボルへ、そして全国に知られるようになりました。

JAXA存続への署名活動なども、皆様と一緒にできるまちづくりの1つだと思います。おそらくこういう大きな話題を拾うことも、まちづくりや区民意識の醸成につながることだと思います。

4 まとめ（コーディネーター）

参考となった取組事例として、光が丘地区社会福祉協議会の若者世代への取り組みと、にこにこ星ふちのべ商店街の取り組みについて全体会で報告します。

課題の再認識については、若者たちを引き出すためには何を若者たちが望んでいるのか知ること、若い世代との信頼関係を持つこと、若者はとにかく忙しいという現状を理解することを担い手が意識していかなければならないということです。

課題を解決するためのヒントについても、若者たちが何をやりたいのかということをとらえることが重要であることです。現在の担い手がいち早くそれをつかんで、どうしたら地域づくり、まちづくりに参加してもらえるのか、そのための仕掛けをつくるのが大事ではないかということでもとめさせていただきます。

第3期第6回相模原市中央区区民会議 第1分科会 委員出欠席名簿

	氏名	所属等	備考	出欠席
1	石井 トシ子	相模原市公民館連絡協議会中央区ブロック		出席
2	浦上 裕史	一般社団法人相模原市観光協会		出席
3	坂本 洋三	相模原市地区社会福祉協議会連絡協議会中央区連絡会		欠席
4	佐々木 亮一	公益社団法人相模原青年会議所		出席
5	武井 弘吉	小山地区まちづくり会議		出席
6	田代 明寛	清新地区まちづくり会議		出席
7	平林 清	光が丘地区まちづくり会議		出席
8	宮津 敏信	公募委員		出席

備考の は、分科会コーディネーターを表します。

会 議 録

会議名 (審議会等名)		第3期第6回相模原市中央区区民会議(相模原市中央区拡大区民会議) 第2分科会 「学生の地域参加について」				
事務局 (担当課)		中央区役所区政策課 電話042-769-9802(直通)				
開催日時		平成27年11月15日(日) 14時12分~15時24分				
開催場所		相模原市民会館4階 第3中会議室				
出席者	委員	5人(別紙のとおり)				
	その他	15人(一般参加者)				
	事務局	3人				
公開の可否		可	不可	一部不可	傍聴者数	-
公開不可・一部不可の場合は、その理由						
分科会次第		1 開会、分科会テーマの確認 2 組事例の発表 3 討論、意見交換 4 まとめ				

主な内容は次のとおり。

【第2分科会コーディネーター】

久松 伸さん（中央区区民会議委員 麻布大学生命・環境科学部講師）

1 開会、分科会テーマの確認（コーディネーター）

この分科会のテーマは、学生から見た、学生の地域参加についてです。地域の方々は、学生をはじめ、体力的にも雰囲気もエネルギッシュな人たちも若い世代と捉えています。

本日は、参加いただきました、高校生や大学生から地域活動にどのような印象をもっているかなど、自由な意見を聞かせていただきながら、今後に生かしていきたいと考えています。また、この場で何か結論づけるということはありませんので、自由な意見をいろいろと発言していただきたいと思っております。

では、取組事例として、和泉短期大学「子育てひろば『はっぴい』」と、桜美林大学「大学祭実行委員会」の活動について発表をお願いしたいと思います。

2 取組事例の発表

（発言内容： コーディネーター 事例発表者 区民会議委員 一般参加者）

（1）和泉短期大学「子育てひろば『はっぴい』」

私たちが通う和泉短期大学は、児童福祉学科単科の学校で、将来は、保育所や幼稚園、福祉関係の職場で活躍していきたいと思っている学生が学んでいます。

『はっぴい』という活動は、地域に根ざした子育て支援プログラムとして、毎月テーマを決めて、親子で保育を体験する内容で、概ね月に1回実施しております。大学内にあるCDCセンターという保育室のような部屋に親御さんたちが来られて、赤ちゃんから兄弟の小学生まで参加いただいております。

具体的な内容としましては、7月は水遊び、9月は手づくりのおもちゃを使っての子どもたちとのふれあい、10月は学生同士でどう子どもたちに運動の楽しさを伝えようという運動遊びを経験しました。

運動遊びでは、まず安全性、そして子どもたちの発達に応じた環境設定を考えて、トランポリンを使って、滑ったり転がったりができるものとししました。学生がどこの補助につくかなど、先生と相談しながら毎月行っています。

また、たくさんのお子さんの前での絵本の読み聞かせをした時には、水遊びをした後で疲れているかなと思ったのですが、先生と題材を一緒に選ぶなど、事前に準備したこともあり、とても楽しく聞いてくれたのが印象に残っています。

この活動をはじめたきっかけは、先生から「実習に向けて少しでも子どもと触れ合える場としても参加してみたほうがいいよ」というアドバイスでした。

実際に参加してみて、子どもたちと触れ合っている過程で、現場は想像していなかった困ったことがたくさん起こりますし、保護者の方ともコミュニケーションがとれて、その子の発達の過程を聞くことができ、とても良い経験ができました。

この活動は、何曜日にどのくらいの時間でやられているのですか。

土曜日の10時から12時ぐらいです。

伝統的な活動ですか。

和泉短期大学の教員から補足をさせてください。この活動そのものは、10数年経っております。当初は本校の体育館を単に開放しているに近い形態でしたが、先ほど学生が話したような形態になったのはここ数年で、時代とともに少しずつ変化しております。

授業の単位になるのですか。

単位にはなりません。

ボランティアのように発展してきたのですね。

教職員も参加しておりますが、学生が主になって活動しております。

(2) 桜美林大学「大学祭実行委員会」

私は、桜美林大学から来ました第49代大学祭実行委員長です。大学祭実行委員会には、現在400名の大所帯で活動させていただいています。

まず、私たちが参加している地域活動について紹介させていただきます。一番大きなイベントとしては、夏に鹿沼公園で開催される大野北銀河まつりです。企画段階から、地域の大人たちに混じって会議へ参加させていただいており、他大学の学生も加わって活動する学生部会のリーダーを桜美林大学が務め、その運営全般を任せてもらっています。

次に、淵野辺駅北口のデッキ下にスペースがあり、そこで定期的にバザールを開いています。商店街の皆さんとともに、会場設営のお手伝いや、自ら出店をしております。

ほかにも、鹿沼公園のさくらまつりの運営、市役所前通りの市民さくらまつりでごみ分別ブースの補助、相模原中央自動車学校で開催される感謝祭の運営スタッフなど、

たくさんの行事に参加しています。

また、プレ大学祭といいまして、他大学の大学祭実行委員が集まって、お互いの大学祭を宣伝するなどのイベントがありますが、その企画運営を行っています。

そういった中で、私たちは、地域のイベントに単なるボランティアとして参加しているのではなく、なぜ自分たちが参加するのか、何を目標とするのかといった意識を持って活動しています。

目的の一例として、実行委員会は、400人も学生が所属しているため、年度初めは、お互いの顔を知らないところからスタートします。そして、地域イベントへの参加を通じて、学生相互がコミュニケーションをとれるようになることや、地域の方と関わることで大人からいろいろ学び、時には、イベントでの失敗事例なども見せていただいております。私たちが本番の大学祭を運営するにあたり、どう計画、行動していけばよいかを事前に勉強することができることで、とても貴重な経験となっています。

また、地域活動を通じて関係を持つことができた地域の大人が、大学祭の広報活動やポスター掲示など、とても協力していただいております。商店街の方にお願いと、「普段手伝ってくれているので、もっと持ってきていいよ。」とっていただき、まち全体に掲示していただけるようになりました。

私は、実行委員会に所属して3年目ですが、5～6年前から、現在のように活発になったと聞いております。今後も、この活動が続いていければよいと思っています。

年間どのぐらいの地域のイベントに協力されていますか。

30件ぐらいです。

30件とは、すごい数ですね。

毎回すべての学生が参加するわけではありません。毎週のように地域のイベントがあり、トップシーズンでは、同じ日に2つのイベントが重なることもありますが、お手伝いであれば、実行委員会所属の400人の中から、参加したい、本当にやる気のある学生を優先して起用しています。また、依頼された内容にもよりますが、例えば、ビンゴ大会が開かれるイベントでしたら、実行委員会にビンゴ担当をしている部門がありますので、地域イベントで運営を勉強させる目的でその部門を中心に学生を編成するといった、場面に応じた人選をしております。

1つの会社のようにいろいろな部門があって、それぞれ専門家がいるのですね。

5つの部署に分かれております。私の場合、1、2年生の時は、渉外担当として地域の方や他の大学と交流を持つことができましたので、実行委員会全体で地域に何か貢献したいと思い、そういう意思を持って委員長を務めましたので、とても地域の方

と関わりを持つことができたと思っています。

3 討論、意見交換

(発言内容： コーディネーター 事例発表者 区民会議委員 一般参加者)

まず、討論に入る前に、中央区の人口動態について、簡単にご説明します。

中央区の特徴について、「15～19歳人口」「20歳～24歳人口」の人口比率は、神奈川県のものに比べて高くなります。ちょうど、この分科会の対象年代である、高校生や大学生の世代です。しかし、そのあとの年代からは、神奈川県と同じ動態となっていくます。

また、同じ時期に出生した者をかたまりとしてとらえた場合、そのかたまりが15歳前後を迎えた時を1とすると、20歳前後で1.4倍となりますが、25歳前後で0.9まで縮まり、その後は変化が少ない停滞期となっていくます。

中央区には、高校が6つ、大学が4つあることから、その世代は中央区に転入しますが、卒業すると就職などが原因で、転出が増えるという傾向がわかります。

また、着目すべきことは、大学入学を機に中央区に転入した学生は、この地域で居住する時間が非常に短いということです。2つの事例発表で主人公となってくれた大学生は、転入しても短期間で転出してしまうということです。しかし、継続的、組織的に活動をされているということは、現在活動している学生がいなくなっても、次の担い手といえますか、担い手が継承されていくということではないでしょうか。

地域活動をした本人は、社会人となれば転出するため、地域に根づくということにはなりません。団体としての活動そのものが持続していることが特徴の一つであると思います。

そのような現状を踏まえ、討論をしていただければと思います。

大野北地区まちづくり会議の会長をしております。大学をはじめとして、地域の学校にご協力いただいていることをお話しします。

大野北地区は、麻布大学、青山学院大学、桜美林大学、和泉短期大学の玄関口ということで大学生が非常に多いところです。たまたま本日は、午前中に淵野辺駅周辺でJAXA移転反対キャンペーンを実施しましたが、特に大学生が協力的に参加してくれました。

麻布大学は、環境衛生学部の学生が、地区のイベントで排出されるごみの仕分けをしてくれています。

桜美林大学は、メインのキャンパスが町田市にありますが、最寄駅が淵野辺駅であ

り、サテライトキャンパスがあることで、いろいろな面で非常にお世話になっています。盛大に開催する大野北銀河まつりはもちろんのこと、公民館事業や、地区の運動会など、ほとんどのイベントにおいて桜美林大学の学生さんに裏方として手伝ってもらっています。

淵野辺駅周辺でイルミネーションを毎年実施していますが、和泉短期大学は、ハンドベルが盛んで、イルミネーション点灯式などに来ていただいて演奏をしていただいたことがありました。去年は相模原高校、今年は地元中学校の吹奏楽部が点灯式で演奏してくれます。このように、中学生、高校生、大学生が地域へ非常に溶け込んでくれています。

また、青山学院大学は、年頭の箱根駅伝で優勝され、その祝賀パレードを実施しまして、2万5,000人ぐらいの方が淵野辺にお越しいただきました。

2つの事例とも、地域に溶け込みつつ活動に持続性が生じた印象を持ちました。では、活動に参加しているご本人たちは、どのような感想をお持ちでしょうか。

では、和泉短期大学の『はっぴい』の方からお願いします。

きっかけは、実習準備のために始めました。数か月经験してみると、継続して参加して下さる方もいらっしゃることから、初めて参加した時には歩みがたどたどしかった子どもが、数か月後には自分で行きたいところへ走っていく様子を見ることで、子どもたちの成長を垣間見ることができました。参加してくれた子どもたちの成長を観察する視点を持つことができた点において、自分に変化があったと思います。

私は、地域参加というよりも、学校内の活動として参加しているイメージを持っています。今回、このような会議で地域活動としての事例発表を経験しなければ、そのような活動をしているという自覚も特になかったと思います。自然体で活動できればよいと思っています。

参加して変わってきたことは、自分の考えの中の甘さを知ることができたことです。7月に水遊び体験をしたときには、子どもたちと仲よくなって楽しめばいいということではなく、子どもは大人以上にとても体力を使っているため、一人一人の体調を観察し、遊びに夢中になっている中でも、保育者の視点で、体力に合わせて休憩や水分補給をさせるといった安全配慮の重要性を学びました。

マニュアルなどで漫然と理解したのではなく、自分でいろいろなことに気がつくことができたのです。この活動を後輩に薦めたい、継続してほしいと思いますか。

経験はもちろん、先輩たちから教わることもありますので、今後も継続してほしいと思っています。

参加される保護者の性別に偏りや特徴はありますか。

お父さんも一緒ですが、どちらかというと、お母さんが多い印象があります。参加するお子さんが多い世帯は、ご両親だけでなく、祖父母も一緒にされていますので、家族全員で楽しめる場になっているかと思います。

いろいろな世代の人が同じ行事に参加することは、とてもよいことだと思います。継続してアイデアを出すことで、家族ぐるみの参加が増えるとうれしいですね。

最近の若者は空気が読めないなどと、世間では言われることもありますが、このような活動を通じて無意識のうちに目配りできるように成長するのだと感じました。

次に、桜美林大学の方に伺います。地域活動を通じて、何か成長や変化を感じましたか。

すごく変わったと感じることは、渉外担当の時です。地域活動に参加しているうちに、自分の名前を地域の人に覚えていただけた場面がありました。大学祭実行委員会という属性で見られているのではなく、一個人として認められているという実感が湧き、この活動に前向きさが生まれました。

イベントで知り合った者同士が今では親友のような仲になっているといった話などを仲間から聞くと、この活動をしてきたことが間違いではないと実感できました。

また、大学祭直前になってポスター掲示の依頼を地域にお願いする時には、地域の皆様にご協力いただき、本当にこの活動をやってよかったなと再確認することができます。そして、参加したイベントを冷静に見つめることができるようになり、どうしたら運営サイドがうまく動けるかという視点、視野が広がったと感じています。

最近思うこととして、現在、横浜市に住んでいますが、相模原の地域活動に参加していく中で、地元に関心がなかったことに気づかされました。自分のまちを歩いてみて、掲示板を見かけると、地元ではどのような活動をしているのだろうといった視野が広がったと思います。

相模原での地域活動を通じて、改めて自分が住む地域というものを認識するようになったのです。こういうことは、なかなか授業や本では実感できないですね。

分科会開催前までにお出しいただいた、「参加者ご意見シート」の中からも、地域の高校生が参加してくれているといったコメントをいただいております。高校生の方でご意見などがあればお願いします。

私は、高校の生徒会に所属しています。学校から地域のイベントやボランティア参加の依頼を受けて、生徒会の役員として参加しています。しかし、それ以外の生徒はイベントの存在を知らない、知っていても興味が無く、面倒くさいから行かないといったことは、よく見聞きしています。中、高生が興味や関心を持つことができる、参加したいと思えるような行事をもっと増やすことができればよいと思います。

興味がないとなかなか重い腰も上がらないですし、高校生や大学生は忙しいですね。平日に自由な時間はありますか。

木曜日に生徒会の定例会があり、水曜と金曜日に塾へ通っています。学校が終わるのは午後3時から4時過ぎに下校の時間となりますが、学校から出される課題をする時間も必要ですので、それ以外のことに時間を割くということがあまりできない現状です。

土、日は基本的には時間が取れますが、今回のようなイベントへの参加のほか、昨日は学校行事で登校しており、必ず時間が取れるというわけではありません。

平日は、自由な時間はなかなか取れないのですね。大学生の方に伺いますが、土、日は、地域活動に参加しようと思える時間はありますか。

桜美林大学の学生です。まわりの友人は、アルバイトなどをする人が多いです。また、大学の周辺に居住する学生は、それほど多くありません。大学のある地域でボランティア活動をしようと思っても、交通費などいろいろ出費がありますので、毎週のように参加することは、経済的に難しいこともあります。

時間的には活動できたとしても、経済的、距離的な問題があるということですね。では、ほかに学生さんからご意見はありませんか。

青山学院大学の学生です。個人的な見解ですが、高校生よりも大学生のほうが、土、日の自由時間はあるように感じます。しかし、その時間を地域のコミュニティに使うことに関して、少し消極的であると感じます。

自分でコントロールできる時間が多いということですか。

そうですね。

では、地域の担い手の方に伺います。時代背景や経済情勢などいろいろ絡み合っており、単純に比較することは難しいと思いますが、皆様が若いときはどのような時間の使い方をされていたのか、どなたかご発言いただけますか。

私は、商店街協同組合の理事長をしております。さて、私が学生のときは、アルバイトに費やす時間が大半でした。

現在は、地域活動というか、商店街の活動にも変化が生まれ、イベントそのものが増えましたし、その中身の企画も多くなりました。そこで、私たちが開催するイベントにおいて、学生たちがどのように参加してくれているか、少しお話をさせてください。

少しでも商店街やそのイベントに興味を持ってもらうため、イベント参加型の企画が増えました。私たちの商店街には、「こけ丸」というキャラクターがあります。着ぐるみがありますので、高校のダンス部にお願いして、着ぐるみの中に入ることに加

え、そのまわりでダンスの発表をしてもらおうといった企画をしました。

また、先日ペインティングパフォーマンスグランプリというイベントを開催しましたが、その時は、別の高校の吹奏楽部が演奏する中で、先ほどご紹介しました「こけ丸」のダンスをしてくれた高校生にダンスを披露してもらいました。

そのようなつながりが生まれ、会場設営やゴミ拾いのボランティアをしてくれる学生を派遣してくれるなどの関連性が生まれてきました。いきなり運営ボランティアの派遣を高校側をお願いしても、そのイベントに学生さんは関心を持ってくれませんし、学校の授業ではなく強制的に参加させることは不可能ですから、高校生が参加することは難しかったのではないかと思います。

次に、今まで発表していただいた事例について、感想を述べさせてください。

和泉短期大学の取り組みについては、すばらしい活動をされているのですから、学内だけでなく、地元地域に少しでも来ていただいて開催することができるならば、活動の価値がますます上がるのではないかと感じました。

桜美林大学の取り組みについては、市役所前通りの市民さくら祭りなどのボランティアに来ていただいていますのでよく承知しておりますが、そのつながりから大学のチアリーディング部に演技を披露してもらうことなどに発展しています。また、淵野辺はJAXAやはやぶさ帰還などで話題性が多い中で、商店街の活動に学生がかかわりをもっていくことで、商店街と大学生のボランティア活動について、知名度や認知度が上がるといった相乗効果が生まれるのではないのでしょうか。

大学生は、市外から参加するため交通費が課題となっていると伺いましたが、商店会のイベントについては、何か方策を検討する必要があるかと感じました。

最後になりますが、相模原はイベントが多いまちだと思います。主催者側で、例えば、1000人の学生に、もれなく告知することは限界がありますので、学生さんも、興味がわきそうなイベントを自ら見つけていただいて参加してもらえるとよいと思います。

桜美林大学の事例と感想の中で、大学周辺の地域活動に参加するうちに、居住する地域の地域活動というのに目が向くようになった、地域活動というものが、お祭りだけではなく、環境問題や防災対策といった活動にも興味が生まれたという点は重要ですね。

すばらしいことだと思います。

ほかに、ご意見がありましたらどうぞ。

私は、光が丘地区で子ども会や自治会の役員をしております。桜美林大学さんの発表について、400人もの大所帯を切り盛りして、地域活動や大学祭の企画運営がで

きるということは、とてもすばらしいと思って聞いていました。

一方で、実行委員会の皆様が、社会人になったとき、どこまで自治会などの地域活動に参加してもらえるのだろうかという点が課題であると思っています。自治会の役員は、高齢層が割と多いと思いますが、その中に、若い人は入りにくいと感じているためです。

自治会の夏祭りの際に、若い世代のボランティア募集をするのですが、回覧やチラシといった紙ですぐに集まらないことはわかっているのですが、ほかに妙案もありませんのでそのような形で募集をしています。

そこで、質問があるのですが、実際に地域活動に参加している中で、自治会活動に若者が気兼ねなく入っていく雰囲気があるのでしょうか。

桜美林大学の学生です。自治会活動は、具体的に何をしているかわからないということがあります。また、若者ボランティア参加者募集について、紙一枚では内容がよくわからないと感じる方が多いと思います。また、個人でいきなり自治会活動に参加しようと手を挙げることに高いハードルがあるのではないかと思います。私自身、もし大学祭実行委員会に加入していなければ、地域活動に参加することはなかったかもしれないと感じております。したがって、参加したことがあまりない人にとっては、もっと高いハードルなのではないでしょうか。

基調講演の質疑でもあったように、現在地域の担い手となっている方も、若い時は仕事で地域活動ができなかった旨の発言がありました。若者世代が地域活動に参加しにくい状況であることを理解しながらも、若い力を必要としているというギャップを埋める方策について、ご意見がありましたらどうぞ。

若者世代は、地域活動に入っていきたいと思ってくれている人はいると思います。いきなり一人で参加しようとするハードルが高いという意見がありますが、若い世代へ少しでも声をかけて誘ったら、地域活動に入りやすいですね。ただ、大きな課題として、誰に声をかけていいかわからないことかと思えます。

そこで、若者世代へ、この地域にはこのような活動をしている人がいるのだよといった声掛け、つながりが機能すればよいと思いますが、現実問題として、なかなかうまく機能していないと思います。

中央区のような人口の多いところでは、日頃から隣近所でコミュニケーションをとることが難しい課題であると思います。いろいろなイベントでの出会いの中で声をかけていくというのも一つかもしれませんが、世代を超えて交流できるような企画を行うことで、声かけの機会を設けていくことも重要かと思えます。

若者世代に時間的な余裕を期待することは難しいことですが、その中でも年配の方

と若い人が交流できるきっかけがあればとてもよいと思います。

高齢社会を迎えていることから、地域活動に参加する方も相対的に高齢化すると思います。また、会社をリタイヤされた年配者のほうが、時間を自由にコントロールできます。しかしながら、イベント時における体力的な部分が課題であり、防災活動などの安全・安心に関する活動については、若い力がほしいと、担い手の方は感じられていると思います。

世代間交流について、地域の担い手の方が、若者世代の考えをくみ取る機会を設けているのでしょうか。また、従前より実施していたイベントについて、時代の変化に合わせた取組事例などはありますでしょうか。

中央商店街では、先ほどお話をさせていただいたように、ペインティングパフォーマンスグランプリという、若者でも興味を持ちやすいテーマのイベントを2年前から始めました。

ボランティアとして漫然と参加してくださいといった誘い方をしても、若者世代の参加は期待しにくいのではないかと感じていたからです。もっと研究していかなければならないと思っていますが、イベントの内容については、各世代が参加しやすい企画を用意し、まずは来場してもらって楽しんでもらい、地域の活動に興味を持ってもらうということしかないと思っています。

ありがとうございました。本日の討論をきっかけに、若者世代のアイデアを盛り込んで地域全体で安心安全な地域が構築できれば素晴らしいと思います。

4 まとめ（コーディネーター）

和泉短期大学「子育てひろば『はっぴい』」の活動については、学生と子育ての世代の交流から、保育した子どもたちの成長を実感しつつ、学生自身も、実際に経験することで、本やマニュアルだけではわからない、運営全体を通じた安全配慮や思いやりが持てる人間に成長してきたという実感が得られ、今後も継続していきたいという内容でありました。

桜美林大学の大学祭実行委員会の活動については、大学祭の企画立案、当日の運営を行っていくことに向けて、いろいろな経験を積み重ねるために、テーマを持って地域活動をしており、自分の成長とともに、自分の住んでいる地域にも興味を持つようになったということを実感されたという内容でした。

2つの事例とも、まずは活動を経験してもらうことが大切であり、世代間の交流を図ることに価値がある点が共通しておりました。

また、個別のご意見等いろいろあろうかと思いますが、まずは世代間が継続して意見の聴と議論を重ねていくことが重要であるという内容でした。

あわせて、事前にいただいた「参加者ご意見のシート」を読ませていただきましたが、イベント、ボランティアや市民活動について参加する機会、実施していることを知る機会を作ることが重要であるというご意見が多かったのですが、地域活動の必要性や、参加しやすい環境づくりといったことについて、一定の議論ができたと思っています。

大学生であれば、卒業とともに生活や活動の拠点が別の場所へ移動してしまうかもしれませんが、相模原市や中央区について、何か誇れるものを持って、旅立ってもらえたらうれしいと思います。

また、「さがみはらフィルムコミッション」では、映画やドラマの撮影を支援しており、中央区が舞台になっているものも数多くあります。エキストラの募集なども行っています。そのような活動を経験することで、学生時代の思い出や誇りの創出につながるのではないかと思いますので、この機会に紹介させていただきました。

第3期第6回相模原市中央区区民会議 第2分科会 委員出欠席名簿

	氏 名	所 属 等	備考	出欠席
1	河本 博	大野北地区まちづくり会議		出席
2	木内 哲也	一般社団法人相模原市医師会		出席
3	関戸 丈夫	田名地区まちづくり会議		出席
4	千葉 更男	公募委員		欠席
5	長谷川 光義	上溝地区まちづくり会議		欠席
6	久松 伸	学識経験者(麻布大学)		出席
7	横山 房男	相模原商工会議所		出席

備考の は、分科会コーディネーターを表します。

会 議 録

会議名 (審議会等名)		第3期第6回相模原市中央区区民会議(相模原市中央区拡大区民会議) 第3分科会 「子ども、子育てを通じた地域参加について」				
事務局 (担当課)		中央区役所区政策課 電話042-769-9802(直通)				
開催日時		平成27年11月15日(日) 14時13分~15時17分				
開催場所		相模原市民会館 第1中会議室				
出席者	委員	6人(別紙のとおり)				
	その他	28人(一般参加者)				
	事務局	3人				
公開の可否		可	不可	一部不可	傍聴者数	-
公開不可・一部不可の場合は、その理由						
分科会次第		<ol style="list-style-type: none"> 1 開会、分科会テーマの確認 2 取組事例の発表 3 討論、意見交換 4 まとめ 				

主な内容は次のとおり。

【第3分科会コーディネーター】

清水 洋子さん（中央区区民会議委員 相模原市私立保育園園長会）

1 開会、分科会テーマの確認（コーディネーター）

子育て世代から見た、子ども、子育てを通じた地域参加というテーマで分科会を進めていきます。

まず、私の自己紹介をさせていただきます。私は、上溝にあり、ひよこ保育園の園長を務めております。平成21年から現職となったのですが、それ以前は、同じ社会福祉法人の高齢者福祉施設の施設長として、高齢者のケアに関わってきた経験もあります。福祉という分野は、特に地域の皆様との関わりが大きく、力をお借りできたことについて、大変ありがたく思っております。

私は、子どもが5人おまして、子どもの小学校入学から高校卒業までを子育て期間とすると、約20年間ございました。その間、仕事を続けながら、PTA活動をしてまいりましたが、継続できた理由の一つに、地域、特にご近所の力をお借りすることができたからではないかと思っています。

現在は、今までの経験が生きるのではないかとということで、保護司をさせていただいております。プライバシーに関する重要情報を取り扱う事項もありますので、そういった点に配慮しながら地域活動を展開しております。

さて、本日は、お二人の方に事例発表していただきますが、お二人とも仕事をもちながら地域活動をされております。中学校のPTA活動、会長などを歴任されているお父さん、子ども会の活動されているお母さんに、体験談を通じたお話をさせていただきます。その中から、子育て世代の現状と課題の議論へ結びつけていきたいと思っております。

2 取組事例の発表

（発言内容： コーディネーター 事例発表者 区民会議委員 一般参加者）

（1）お父さんのPTA活動を通じた取組み

平成21年から本年まで6年間、中学校のPTA活動を行っています。平成22、23年が副会長、平成25、26年が会長、本年は再び副会長をしております。自己

紹介も含めながら、PTA活動について紹介します。

私は、横浜市の消防職で、消防車の運転、救急隊員として約30年勤務しています。

息子の中学校の入学式の際、式典のあとにPTAの役員決めがありまして、親御さんが順番にPTA活動を受けられるか回答するのですが、私の前の方まで、受けられる方が誰もいませんでした。私が回答の最後でしたので、できませんと答えても同じことの繰り返しとなってしまいますし、息子が中学校に入学したと同時に、何か地域活動ができないかなと思っていたこともありましたので、お受けしたのがきっかけです。

初年度は、学年委員を経験しましたが、当時の学年委員長さんがとても素晴らしい方で、私の仕事やシフトについて理解していただきました。学年委員会を私の非番の日にすべて開催していただきましたので、1年間すべて出席することができました。

次に、PTAと地域の関わりについてお話しします。私の中学校では、保護者、地域の自治会長や民生委員の方々を交えたPTA地域教育懇談会を毎年9月に開催しております。懇談会の目的は、子どもたちの健全育成を図るため、PTAや学校では把握しにくい、学校外での子どもたちの様子や、地域における危険箇所に関する情報など、学校にとって非常に有効な情報やご意見をいただいております。地域の方々からのご意見を学校に吸い上げ、学校と地域、そして保護者、この三者が一体化した活動につながればと思っております。

また、地域の方が中心となって、毎週水曜日に「あいさつ運動」行っていておりまして、毎週木曜日は、PTAが実施しています。20年以上継続しているのではないかと聞いております。当時、学校が荒れており、そこで保護者が立ち上がって、改善の一助に「あいさつ運動」を始めたのがきっかけでした。朝、地域の方々が学校に来て子どもたちに声を掛けていただけ、そして、PTAの保護者が学校に来て子どもたちとあいさつを交わすというつながりは、とても重要だと感じております。現在は、生徒会も加わり、正門で生徒会、保護者、地域の方と一緒に「あいさつ運動」を行うこともあります。

私が5年間「あいさつ運動」に参加して得られたことは、入学当初から子どもたちの顔をみることができ、卒業する頃には、子どもたちの顔がよくわかるようになりました。また、校外で子どもたちと出会っても、普通にあいさつできるようになったということが大きな財産と思っております。

「あいさつ運動」や用事があり来校している私を見かけると、血気盛んな子どもたちから「暇なおじさん」などと言われることもあります。が、「そうだよ。暇だから学校に来るのだよ」というように、コミュニケーションを取っています。

次に、子育て世代が地域活動に参加していく中での工夫ですが、例えば「あいさつ運動」の参加については、私自身も仕事が休みの日でなければ参加できませんので、あまり強制力を持たせずに自由に参加してくださいといった趣旨のお便りを家庭や地域に配っております。だからこそ、約20年間続けてこられたと思っています。ほかの地域活動でも同じ課題があるかと思いますが、そのような配慮が必要ではないかと思っています。

また、私自身のPTA活動が長続きしている理由の一つに、大した知識も何もないので、楽しくやることをモットーにしたことがあると思います。なお、PTA役員がなかなか決まらないという現状については、私が引き受けた当時とあまり変わっていない状況であり、難しい課題であると思っています。

地域の方に、中学生が地域にできることは何かと尋ねたことがあります。すると、中学生は中学生らしく学校生活を行っている、活発に部活動をしているといった姿を見せてくれることが地域の方にとって喜ばしい、PTAの役員が楽しそうに、にこにこしながら活動していればそれでいいのではないか、というお答えをいただいたことがあります。

最後になりますが、私には子どもが2人いるのですが、兄弟で在学期間が重ならなかったため、6年間PTA活動をしています、本当に大きな財産になったと思います。

ありがとうございました。ご質問がありましたらどうぞ。

私は、星が丘地区で自治会長をしております。地域をよくしていくには、大人の思いやりや気配りが大切であると実感しております。小学校の育成協議会の中で、放課後に関する話がよく出るので、自治会区域の子ども会にアンケートをしてみました。すると、回答の約9割の家庭でお母さんがお勤めをされておりました。学校の放課後である午後3時から6時の間が親にとって空白の時間になるのです。そこで、地域で子どもたちを守れないかということで、今年の6月に「グリーンハットタイム」という、みどりの帽子をかぶって、大人たちが定期的に見回りする活動を始めました。週あたり、3日から4日の午後3時から6時まで、自治会区域内を歩いています。最近では、私のことを見かけて「会長さんだ」といった声をかけてくる子どもが増えてきました。

そのような中で、子どもが悪さをしていたり、なにか問題が起こったときに、どこまで子どもたちを注意したり、どの程度まで相談を受けてあげればよいかといった、対応に苦慮する場面があると思いますが、どのように対処されていますか。

難しい質問ですね。私の場合、子どもの目線で常に対応しておりました。例えば、

たばこを吸っている子どもを見つけたとします。自分たちの学校の生徒ですから、見て見ぬふりをしたほうがよいと考える向きもありますが、子どもたちはPTAの会長をしていた私の顔を知っていますから、必ず「おい」という形で声をかけます。すると、注意された子どもは、「いや、たばこじゃないよ」とか何とかいいますが、すぐに問題行動をやめます。

先ほども触れましたが、校外でも子どもの方からあいさつしてもらうことが随分増えました。中には、「あ、今年は副会長に格下げの」というような軽口をいう子どもがおりまして、「はいはい、そのとおりですよ」といった会話を常にしております。

私が子どもの頃は、地域の中に注意したり叱ったりしてくれる大人がたくさんいたように記憶しているのですが、現在は、なかなかいないのでしょう。そのような中で、学校の応援団として来ていただける地域の方々は、子どものことを思って叱ってくれる点においても活躍していただいておりますので、学校からもすごく信頼されております。

結論としては、何か問題があれば、私は積極的にその場へ行くようにしています。また、指導方法については、小学生の場合、例えばその場所の危険性を理解していないといった、なぜ怒られるのかを理解していないこともあるため、取り扱いも異なります。小学生に対しては「危ないよ」と優しく声をかける程度ですが、中学生に対してはその点を理解しておりますので、怒るときはしっかり怒るスタイルです。

ありがとうございました。お父さんという立場で、積極的に指導できることがあるということがよくわかりました。続きまして、子ども会活動について事例の発表をお願いします。

(2) お母さんの子ども会活動を通じた取組み

まず、自己紹介をさせていただきます。私は、保育士をしております。子どもが2人おりまして、上の子は今年成人しまして、下の子が子育て真最中の小学5年生です。

今年から子ども会の役員になったことが、地域活動のきっかけです。3年前に引越しをしましたが、転居する前と同じように、すぐ子ども会に入会しました。

現在の地区は、子ども会と自治会のつながりが強く、子ども会に入ると同時に自治会にも加入するといった連携ができていました。しかし、子ども会や自治会に加入したからといっても、ただちに直接的な関わりが起こるということはありません。転入した当初は、仕事と家庭の往復が中心で、子ども会や自治会の活動を知る機会は、回覧を見るぐらいで、活動の内容もよくわからなかったというのが正直なところです。

おそらく大半の方も、加入しているだけで活動の内容は理解していないのではない

かと思えます。

下の子が5年生になった今年度、子ども会役員の順番が回ってきました。役員になって、子ども会の加入世帯数が40世帯、子どもの数が50人、未加入世帯が4世帯、未加入の子どもの数が4名ということを知り、加入率がとても高い地域であるということがわかりました。

役員を引き受けるにあたり、フルタイムの仕事を持っていることで、会合や行事に出席できず迷惑をかけるのではないかとということが一番不安でした。6名しかいない役員の中で、それぞれ担当をもって、いろいろな活動をしていくことができるだろうかということをとて心配しました。しかし、担当業務がスムーズにできるよう、経験された方がうまく役員に組み込まれているうえ、役員の担当を決める際も、ライフスタイルに合った動きができるようにとても配慮していただきました。具体的には、仕事の都合で平日の昼間に活動しにくいですが、月に一度であれば平日に休みを取ることができますといったことを伝え、校外委員を務めることとなりました。

役員になって見えてきたことは、困り事があっても、どこに発信していいかわからない家庭があるということでした。最近、外国人の保護者の家庭が少しずつ増加していると感じます。

私たちの地域にも、子どもが日本語を親に通訳をしている家庭の方が転入してきました。家族関係は何も問題なく、地域との交流を避けているということもないのですが、その家庭と、学校や地域の間における連絡事項が、言葉の壁や習慣の違いから、親には理解が難しく伝えていく場面がありました。例えば、地域の子どもの見守りや通学路の交通安全指導、いわゆる旗振りの当番について、「それは何ですか」ということから始まりますし、それをほかの言語で伝えるということが難しいと感じました。

学校にこの件で相談する機会を設けてもらい、その方の知人に通訳を依頼できたことから、旗振り当番の意味をやっと伝えることができました。この経験から、言葉の壁や、国籍の違いといった苦労がわかりました。

また、子どもたちのことを考えてくださる地域の自治会の方や高齢者がいらっしや、通学路などの見守りや、夏休みの自主学習ボランティアをしていただいております。

役員を引き受ける前は、それらの活動を知らなかったのですが、知った後は、とてもありがたいと思いました。子育て中で共働きですと、地域活動を引き受けることは、時間的に難しいかもしれませんが、まずは地域の中のネットワークを広げるために積極的に参加してほしいと思いました。そのためには、子ども会の役員経験者など、地

域活動を経験した方が声をかけて、一步前へ出るきっかけづくりをしてみると参加しやすくなると思いました。

今年で子ども会役員の任期は終了します。今日は、今後、仕事と両立してどのように地域と関わりを持っていくかを考える機会になりました。発表は以上です。ありがとうございました。

3 討論、意見交換

(発言内容： コーディネーター 事例発表者 区民会議委員 一般参加者)

ありがとうございました。では、お二人がお話しされた内容について、ご質問やご意見がございましたら、ご発言をお願いします。

私は、青少年健全育成協議会の活動をしております。最近、子ども会や育成会がなくなっている地域が多くなっていると聞いております。減少の理由を聞きますと、保護者側で役員を引き受けることが大変であるといった負担感が多いため、解散してしまうとのことでした。

当の子どもたちも、塾やスポーツなどの習い事などが多く、子ども会に参加することが減少しているのではないかと感じています。

そこで、子ども会の加入者増について伺います。また、外国籍の方への働きかけについてもお話がありましたので、あわせてお話いただければと思います。

私の地域における子どもの会参加率は、先ほどお話したとおり、とても高い状況となっております。ジュニアリーダーについても、ほかの地域の方とお話をすると、小学4年生から6年生の間で参加してくれるお子さんを探すのが大変と伺っています。一方、私の地域では、伝統なのかもしれませんが、子どもたちのほうから、積極的に参加してくれます。おそらく、自分より上の学年の子どもたちの生活や活動を見てきたのでしょう。また、地元のお祭りなどでも、自治会の方が子どもを大事にしてくださって、出店で食べ物を振る舞っていただくなどしてくれます。そのようなつながりから、地域における子どもの居場所というのできているのかなと感じます。

外国籍の方については、子ども会の内部で解決することが難しく、学校にも相談をしました。学校側も子どもたちは、地域の中で一緒に育っていくという観点を理解していただき、担当の先生と外国籍の保護者、そして我々の三者で面談をする場を設けていただいたことがよかったと思います。

4月に転入してきた当初は、無理にアプローチせず、まず雰囲気慣れてもらおうと、登校班の集合場所を知らせる程度からはじめました。2学期になって慣れてきた

ところで、子ども会の当番を少しずつ理解してもらおうという形で進めました。

私は、小山地区で公民館活動をしております。子ども会についてですが、小山地区においても、100%近い加入率の団体もあれば、500人近く子どもがいるにも関わらず30人程度しか加入していないといった団体もあります。子ども会の組織がしっかりしていると、公民館行事、例えば運動会などに多くの子どもたちが参加するという効果があります。

公民館は、これからも地域の拠点でありたいと思っているのですが、PTAや子ども会の役員をされた方が、公民館から情報発信していただけないかと期待しております。PTAや子ども会の活動が一段落つきましたら、公民館活動に入っていただけることを期待しております。

公民館の各種運営協議会には、各団体の会長さんがお一人だけお越しになるのですが、卒業式などでお呼びいただき参列すると、会長さん以外にもすばらしい役員さんがたくさんいらっしゃいますが、公民館活動においては、PTA役員さんの顔が見えないと感じています。昔は、PTAをなさった方のうち、かなりの割合で公民館の役員になっていただいております。

そこで、これからの地域活動についてどのようにお考えかお聞かせください。

PTAの関連からお答えします。私の中学校PTAでは、会長は公民館運営委員会、副会長の一人は公民館の青少年部会、もう一人は地区社会福祉協議会へ参加しており、手分けして関わりを持たせていただいている認識です。

また、PTA活動以外でも、自治会で会計を引き受けておりますので、まず、自治会活動についてお話をさせていただきます。レクリエーション大会の時の感想をお話しますと、区長、組長のご苦勞があつてのことと思いますが、お父さん、お母さん、お子さん連れの家庭からの参加が非常に多いと感じられました。

次に、中学校のPTA活動における工夫を一つご紹介します。中学校の体育祭は、土曜日に開催しております。広報委員を各学年から6名、合計18人を募っておりますが、委員さんは、広報活動の一環として、自分のお子さんをフィールド内に入って写真を撮って構わないという形で実施してみました。このような工夫で、少しでもPTA役員の引き受け手が増えればよいと思っています。

子育て世代の方が地域や学校に参加するきっかけとして、体育イベントの活用がよいのではないかとということで見直したところであります。公民館活動についても、同様に考えております。

私の地区では、組織化とまではいかないのですが、歴代のPTA役員さんでリーダー的な存在がおりまして、連絡を取り合つて公民館活動に参加しております。

いろいろな形で、地域活動に参加されているお話を聞くことができ、とてもよかったと思います。さて、少し先輩の担い手の方から、自治会活動における子育て世代の参加について、ご意見やご感想を伺いたいと思います。

私は、星が丘地区で自治会長をしております。さて、事例発表については、非常に楽しく聞かせていただきました。共通して言えることは、仕事を持ちつつ子育てをしている方が地域活動の役員になってきたときに、各人のライフスタイルに合ったこと、その方ができることについて、地域の担い手は、よく見極めることが重要であることをよく理解できました。そうすることで、役員さんを新たにお願する時、引き受けやすくなると感じました。子育て世代は、仕事第一となりますから、お二人とも、ご自身が非番の時や活動できる時、月1回からといった形で始められたのだと思います。仕事と子育てを両立できないから役員を引き受けないといった固定観念ではなくて、いろいろなことを経験されることも必要なことであると思います。

私の地域においても、焼肉店を経営している方が自治会の役員になったとき、役員の定例会開催日をお店の定休日に合わせたことがあります。そのような配慮をすると、その方は、とても一生懸命活動していただきました。また、役員を引き受けるにあたり、このような配慮をしていることが地域に伝わったようです。

子育てを通じた地域参加のためには、さまざまな配慮をしていくことが重要ですし、そのような環境が整えば、できることはやっていこうと思っている人たちが集まり、それが地域づくりへつながると思っています。

地域の担い手側の皆様も、新たに役員になろうとする方を支えるうえで、いろいろとご配慮されているということがわかりました。別のご意見はございますか。

私は、横山地区で公民館活動をしております。私も自治会長を何度も務めた経験がありますので、実際に子育て世代の皆様が、地域活動に参加する苦勞を承知しております。

さて、市の制度や組織には、青少年指導員や子どもたち自身も参加するジュニアリーダーといった、子どもの育成、指導を目的とするものがあります。

子ども会の数が減少し、そして入会している子どもたちが減少していく中で、地区子ども会育成連絡協議会、地区子連と呼んでいますが、その団体は残っています。地区子連が青少年指導員の活動の場を確保していく必要があるのですが、失礼な言い方をしてしまうと、地区子連そのものが形骸化しており、青少年指導員が活動するような場所が実際には少なくなっている状況にあります。青少年指導員のなり手が少なく、子どもたちの自主的な運営の場となる子ども会を担当する人が、地区子連の役員と重複する保護者の手に委ねられている状況であり、それらがうまく機能していないと思

います。地区子連というのは、少子化とともに姿を消していくのかなと思ってしまうわけですが、青少年指導員は、ジュニアリーダーを育て、中学生に地域活動をする場を与え、それが地域の担い手となる世代を育てていくという意味で無くてはならない存在であると思います。

ありがとうございました。子ども会の活動について、活発なところもあれば、そうではない地域もあり、状況も異なると思いますが、皆様の地域ではいかがでしょうか。そして、参加されている子育て世代や子どもたちの状況などについて、どなたかお話しいただけますか。

私は、横山地区で青少年指導員などの活動をしております。新住民が多い地域を「新しい地域」、そうでない地域を「古い地域」に分けてみますと、上溝地区や田名地区は、「古い地域」になると思います。横山地区にそれをあてはめてみますと、非常に「新しい地域」であると思います。上溝地区などは、昔からお住まいの方々といいますが、地域の付き添いを果たしていただける方がいると思います。しかし、横山地区においては、そのような方が根付いていない、もしくは、そういった考え方がないと思います。

60年代の所得倍増計画、70年代初めまでの高度成長期に10代を過ごした世代が地域の担い手でしたが、その後の世代に交代する時期になっていると思います。

いろいろな考え方があろうかと思いますが、子育て世代に対しては、時代背景などを深く考えて対応していかなければならないと思います。

私は、光が丘地区で地域活動をしております。まず、先ほど発表していただいた内容は、地域活動を始めて数年の者にとっては、成功事例と言えるものかと思います。

近隣において、子ども会の役員の方が多数決で自分たちの子ども会を消滅させていると耳にすることがあります。参加する行事や自主事業を減らして、ある意味、団体が自滅する道を選択しており、地域でも課題となっております。

ある関係者に、地域活動は子どもにとって大事だと思わないかと聞いたところ、私たちは、スポーツのサークルに入っているが、とてもよいコミュニティができていること、子どもの発達や教育という点でも随分うまくいっていることから、地域のお祭りの動員や、敬老祝賀があるから合唱してほしいといった、自発的でない活動に参加させられる意味がわからないとのことでした。私も、深く考えると、一番大切なのは個々の人間であり、それぞれ自分たちの生活や幸せに暮らしていくことが大事であると思う部分もあるので、必ずしも地域との関わりがなくとも、別のコミュニティで健全に子どもが生きていけるのであれば、それもよいかと思います。

地域活動をしていただいている方は、とてもありがたい存在ではあるけれども、地

域活動に親子を呼び込みたいとしたら、なぜその活動をするのかというメリット、言い換えれば長所をはっきりとさせる必要があると思います。親にとって、かけがえのない何かを育むことができる、与えてあげられるから、地域の担い手たちは、あなた方を呼んでいるという、大義を説明できなければ、実際に呼び込むことはとても難しいと感じています。

そこで、成功事例の中で、主催された側ではなく、参加した子どもや親たちの視点で「やっぱり地域活動って大切だ、関わるのが重要だ、関わってよかった」と思ってもらえたのか。また、そうだとしたら、何に対して価値を見出すことができたのかについて、お考えを聞かせていただきたい。

ご質問が多岐にわたり、全てにおいて答えが出ていないところです。

P T Aのお話ですと、高校や専門学校への進学や、就職して社会人になるといった出口保証といいますが、進路相談を中学校の先生はしていく立場になります。親も同様に、子どもに勉強させたり、習い事させたりと、その課題に向けて一生懸命取り組んでいると思います。

そういった環境の中で、P T Aに参加していただける親は、非常に少ない状況です。しかし、その活動をなくすことはできませんし、それは別の問題だと思います。その中で私が大切にすることは、仕事やプライベートの関係で会合や行事に出られないことは仕方ないことだという運営です。

もう一つは、P T Aの役員を受けていない方へ、役員の活動を楽しく見せる方法を試しています。役員の皆さんが楽しそうに活動をしている様子を見て、役員でない人たちも参加しようかと思ってもらえることを目的の一つとしてP T A活動をしております。

したがって、先ほど子ども会の課題でありましたが、活動をする必要があるかないかという観念的な部分も大切だと思いますが、P T A活動のよい部分、楽しい部分を少しでも見ていただいて、地域の方と一緒にあり方を考えられればと思います。

自治会活動について、例えば地域のレクリエーション大会であれば、準備が大変ですので、周辺の自治会では行わなくなり、地区連合での開催に一本化しているところが大半となりましたが、私の自治会では、今でも単位自治会でレクリエーション大会を実施しております。普段仕事をしているお父さんが、家族を連れて会場の学校に来てくれますので、活躍できる部分を少しでも多く引き出してあげることによって、地域活動や子ども会に入る子どもが増えるのかなと思っています。

いろいろと模索中であり、結論になっていない部分も承知しておりますが、お答えに替えさせていただきます。

地域活動やPTAなどを通じて、子どもやその親の顔が地域によく知られていると、例えば、災害時に避難所で生活するといった場面において、精神的に安定するといった恩恵や効果があると考えられます。

先ほどお話があったとおり、地域以外のコミュニティでうまくいっていると言われてしまうと、その先に話が進んでいけないと思いますが、参加することの大義の部分については、身の回りの小さいことではなくて、我々が地域づくりにおける何かを担っているから活動に加わってほしいという、その何かを伝えていく努力が必要かと思えます。

本日配布されていた、光が丘地区自治会連合会で作成された自治会加入促進のチラシを読みまして、これこそ地域活動をする目的であると感じました。

チラシの冒頭に「自治会に入らなくても困らない、本当の理由」と記載があったので第一印象に違和感がありましたが、よく読んでみると、地域の方が担っているからこそ入らなくても困らないという、自治会活動を周知する加入促進の内容でした。これがまさに答えだと思えます。その中で、私たちが担っている小さな活動、例えばPTA活動なり、自治会活動なりを楽しくやっていることを見せることが一番いいのかなと思えました。

大野北地区で民生委員を務めております。二つの事例を聞いて、大変うらやましい環境であり、地域の状況がよく伝わりました。

自治会、子ども会、PTAや学校などの青少年関係団体と、青少年指導員、民生委員・児童委員、青少年相談員などの青少年指導者で構成する地区青少年健全育成協議会があり、地域の子どもたちを見守る運動を協議会でしていかなければならないと思えます。個々の団体の会長さんの努力だけでなく、地域全体で各団体をつなげていく必要があると思えます。

一例として、学校や家庭、地域をつなげる運動の一環として、よさこいソーランを踊るイベントを大野北地区で実施したことがあります。校長先生を筆頭に教員の方、親、子どもが加わりました。その中で、言葉だけではなく、手と音楽で伝えることができるようになりました。

現在の課題は、青少年関係の団体や指導者のネットワークが十分機能していないことだと思えます。青少年育成協議会の役員は、子育てを終わって数十年経った人が大半であり、自分の経験と現在の状況にかい離が大きいと思えます。そのような状況の中で、今後の取り組みについて検討することは、難しいとも思われますが、少しでも活性化するように組織全体で考えていく必要があると思えます。

小山地区で公民館活動をしているものですが、先ほど、PTA活動が終わられたら、

公民館活動に入っていたきたいと申しあげましたけれども、これからの公民館活動は、PTAや子ども会の方と話し合う場が必要であると感じました。顔が見えないのではなく、顔が見える活動をしなければならないことを気づかせていただきました。

4 まとめ（コーディネーター）

結論が出ないテーマであります。その中で、皆様がお話されたことをまとめていきたいと思います。まず、何回か話がありました、楽しくなければ参加しないということが大きな課題であり、そのためにどのような工夫が必要であるかということです。

基調講演においても「若い世代は、興味のある分野には参加する」ということを話されていきました。子育て世代にとって、子育てに関してはすでに興味のある一番の分野ではないかと思いますが、それ以外の興味のある分野を、担い手側は、模索しなければならないと感じました。

また、基調講演やこの分科会の終盤に同様のご意見がありました。若い世代と担い手側の双方が補える関係をつくっていかないと、いろいろな分野の活動が衰退してしまうと感じました。

PTA活動をされた方が公民館活動に参加してほしいといったお話もありましたとおり、地域活動の次のステップへつながるための活動も必要であると感じました。

これらを要点として、第3分科会のまとめとさせていただきますと思います。

第3期第6回相模原市中央区区民会議 第3分科会 委員出欠席名簿

	氏名	所属等	備考	出欠席
1	井上 政市	相模原交通安全協会		欠席
2	木村 清	横山地区まちづくり会議		出席
3	清水 洋子	相模原市私立保育園園長会		出席
4	代田 昭	中央地区まちづくり会議		出席
5	竹田 幹夫	星が丘地区まちづくり会議		出席
6	永井 廣子	相模原市立小中学校PTA連絡協議会		出席
7	中西 豊和	相模原市民生委員児童委員協議会		出席
8	本郷 永子	公募委員		欠席

備考の は、分科会コーディネーターを表します。

会 議 録

会議名 (審議会等名)		第3期第6回相模原市中央区区民会議(相模原市中央区拡大区民会議) 第3部 全体会 閉会			
事務局 (担当課)		中央区役所区政策課 電話042-769-9802(直通)			
開催日時		平成27年11月15日(日) 15時45分~16時50分			
開催場所		相模原市民会館 第1大会議室			
出席者	委員	20人(別紙のとおり)			
	その他	60人(一般参加者)			
	事務局	14人(中央区長、副区長、他12人)			
公開の可否	可	不可	一部不可	傍聴者数	-
公開不可・一部不可の場合は、その理由					
会議次第	<p>開会</p> <p>第1部 基調講演</p> <p>第2部 分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1分科会 若い世代の地域参加について ・第2分科会 学生の地域参加について ・第3分科会 子ども、子育てを通じた地域参加について <p>第3部 全体会</p> <p>閉会</p>				

主な内容は次のとおり。

【全体会コーディネーター】

井狩 芳子さん（中央区区民会議会長 和泉短期大学教授）

1 全体会の進行について（コーディネーター）

全体会につきましては、各分科会の議論について発表をしていただいた後、皆様と意見交換を行います。会場全体で、小さなことでも共感や共有することができれば、大きな収穫であると思っております。では、順次発表を始めさせていただきます。

2 各分科会の結果発表

（1）第1分科会

発表者 石井 トシ子さん（第1分科会コーディネーター）

ア 分科会のテーマについて

「現在の地域の担い手から見た、若い世代の地域参加について」をテーマに、仕事をもち、家と職場の往復を中心とする生活の若い世代は、地域への関心が低く、地域とのかかわりが乏しい状況であるため、若い世代が地域活動に関心を持ち、地域活動に参加して担い手となるために必要な取り組みなどについて話し合いました。

イ 取組事例について

（ア）光が丘地区社会福祉協議会の取組み

- ・相模原市中央区地域活性化事業交付金を活用して青少年を対象としたボランティア人材登録制度を構築し、地域イベントへの参加促進につながった。

（イ）にこにこ星ふちのべ商店街の取組み

- ・相模原市や中央区のシンボルとなっている「JAXA」や「はやぶさ」をテーマとしたさまざまなイベントについて、学生と連携した活動を実施した。

（ウ）意見交換のなかで寄せられた取組み

- ・50歳未満の若いメンバーに企画を任せて地域活動の経験者を増やした。
- ・スポーツイベントなどで子どもを中心とした事業を企画し、子どもの参加に比例して、親世代の参加者を増やした。

ウ まとめ（課題の再認識と解決するためのヒントについて）

（課題 解決するためのヒント）

若い世代が自由に活動できる環境が整っていない。

若い世代に参加してもらえる「きっかけづくり」が必要である。

若い世代が何を望んでいるのかを把握する。

参加する若者に明確な役割を担ってもらい、達成感を味わってもらう。

若者との信頼関係の構築が重要であり、担い手側においても彼らが何かを失敗しても次につながるような体制をとる。

若い世代が中心となり企画した事業を地域や団体が受け入れ、現在の地域の担い手が新たな担い手のサポートに回る。

中学生について、学校側の協力が得にくい状況があった。

中学生が参加しやすい、学校側も参加させやすい環境を構築する。

エ JAXA 存続に向けた取組みについて

中央区区ビジョンに「人と宇宙をつなぐ中央区」という将来像があり、そのシンボルである JAXA の存続に向けた取組みは、区民一人一人ができるまちづくりのひとつである。

（2）第2分科会

発表者 久松 伸さん（第2分科会コーディネーター）

ア 分科会のテーマについて

「学生から見た、学生の地域参加について」をテーマに、イベント参加だけでなく、学生がさらに地域活動に参加して、担い手となるために必要な取組みなどについて話し合いました。

中央区の人口動向の特徴は、20歳前後の転入が増加し25歳前後に転出する傾向があります。また、大学入学をきっかけに転入した学生は、卒業後に巣立っていくため、この地域で居住する期間が非常に短いという現状があります。

イ 取組事例について

（ア）和泉短期大学「子育てひろば『はっぴい』」の取組み

- ・地域に根ざした子育て支援プログラムとして、学生が中心となり毎月テーマを決めて活動している。また、当初は園庭開放から始まった事業だが、地域

の子どもたちと継続して活動することで現在のような事業に発展した。

- ・学生にとって自主性がある活動であったため、安全性や個々の子どもたちの発達にあわせた環境設定とするなどの配慮や気配りがきくようになり、自分自身の成長を感じた。
- ・お子さんと一緒に、親世代、祖父母世代も参加できるため、学生がいろいろな世代と交流を持つ機会となった。

(イ) 桜美林大学「大学祭実行委員会」の取り組み

- ・実行委員会は、約400名在籍しており、機能別に5つの部署から構成されている。
- ・年間約30回程度、地域イベントに参加しているが、経験を積みたい事項や得意分野にあわせて、部署や学生を選抜して派遣している。
- ・地域イベントに参加する目的は、大学祭を運営する上で必要となる経験を積むことを目的としている。
- ・さまざまな世代と交流する機会が増え、コミュニケーション能力が向上するなど、自分自身の成長を感じられた。
- ・市外に在住しているが、地元の地域活動に対しても関心が持てるようになった。

(ウ) 意見交換のなかで寄せられた取り組み

- ・地域の学生が、イベントでのごみの分別のボランティアや、吹奏楽部での演奏など、多くの場面で活躍している。

ウ まとめ（課題の再認識と解決するためのヒントについて）

（ 地域活動に参加した効果 課題 解決するためのヒント ）

地域活動に参加した学生に共通することは、経験できることや身につけられることが非常に大きいと改めて気づかされている。

さまざまな世代とコミュニケーションをとることで、地域参加へのきっかけを作ることができた。

地域活動の経験を通じて、大学卒業後も、相模原市あるいは地元での地域活動に継続して参画していく線が繋がった。

学生が地域活動に参加しやすい工夫が必要である。

学生が参加しやすいテーマ設定が重要である。

学生が個人で地域参加しようとするにはハードルが高いため、地域の方から学生へ声を掛けてもらえるとハードルが下がる。

(2) 第3分科会

発表者 清水 洋子さん(第3分科会コーディネーター)

ア 分科会のテーマについて

「子育て世代から見た、子ども、子育てを通じた地域参加」をテーマに、今まで地域と疎遠であった若い世代でも、子どもや子育てが地域との関わりを持つきっかけとなるため、地域活動の担い手となるために必要な取り組みについて話し合いました。

イ 取組事例について

(ア) お父さんのPTA活動を通じた取組み

- ・役員初年度において、仕事のスケジュールについて理解してもらい、非番となる日に会議を開いてもらうなどの配慮をしてもらえた。
- ・PTAと地域団体で「あいさつ運動」を実施しているが、自由に参加してくださいといった趣旨のお知らせをして、強制力を持たせないようにしている。
- ・自身のPTA活動が継続している理由は、楽しくやることをモットーとしているためである。
- ・保護者にPTA活動へ興味を持ってもらう工夫の一つに、広報委員は、競技フィールド内に入って自分の子どもの写真撮影をして構わないというメリットを打ち出した。

(イ) お母さんの子ども会活動を通じた取組み

- ・仕事を持っているが、ライフスタイルに合わせて、担当できる業務を割り振りしてもらった。
- ・担当業務がスムーズに行えるよう、経験者が役員に残る運営をされていた。
- ・言葉や習慣の違う外国籍の方とのコミュニケーションについて、学校のサポートもあり乗り越えることができ、よい経験となった。
- ・子ども会と自治会のつながりが強く、転入時においては、自治会加入と同時に子ども会へも加入する地域特性がある。

ウ まとめ（課題の再認識と解決するためのヒントについて）

（ 課題 解決するためのヒント ）

子育て世代は、楽しくなければ参加しない世代である。

若い世代が興味のある分野を模索する必要がある。

役員になることで、メリットが感じられる工夫をする。

仕事や家庭がある中で、地域活動に参加することが時間的に難しい。

ライフスタイルを理解し、担当できる業務の配慮や会議開催日などを弾力的にするなどの工夫をする。

行事等の参加が自由な雰囲気醸成し、強制力を持たせない。

言葉や習慣が異なる外国籍の家庭が増えている。

お互いの文化の違いを理解し、活動の内容をゆっくり伝えていく工夫をする。

地域のさまざまな団体が弱体化しつつある。

若い世代と、現在の担い手世代相互が補える架け橋をつくる。

P T A や子ども会の役員を終えた方が、公民館や自治会活動などの次のステップへ活躍のフィールドを広げてもらうための活動を、現在の担い手が行う必要がある。

3 意見交換

（発言内容： コーディネーター 分科会発表者 一般参加者）

会場の皆様と意見交換を始めさせていただきます。ご質問や新しいアイデア、取組事例などのご意見をお願いします。

星が丘地区で自治会長をしており、本日は、第3分科会に参加しました。

さて、第1分科会の発表で触れられた、若い世代との信頼関係を構築することについて、とても重要であると思いました。私の自治会においても、30代から40代の若い世代で構成される団体があり、信頼関係を構築する観点で、年に2、3回対話を持っております。

彼らには、日頃から信頼していることを伝えたくて、体力を使う活動は協力してほしいことをはっきり伝えました。すると、実績の一つとして、周辺6つの自治会青年部がまとまって、夜みこしを運営してくれました。

重要なことは、現在の担い手が若い人を信頼すること、要望をはっきりと伝えること、感謝の気持ちを言葉でしっかり伝えることが大切だと思いました。

そこで、第2分科会について質問があります。若い世代、特に学生などの地域活動の参加を増やすための事例や、彼らが参加することによって企画に変化があったといった事例があれば教えてください。

第2分科会から発言します。分科会終了後に、高校の先生とお話をさせていただく機会がありました。その中で、高校生は、日頃から地域活動へ積極的に参加していない状況があります。一方で、今年の初めに大雪が降ったときには、地域の雪かきをしたいと多くの学生から申し出がありました。イベント参加となると数名程度となりますが、潜在的には、災害時において多くの生徒が手を挙げてくれるのではないかと考えております。生徒たちは、地域に貢献したいという気持ちがあることを踏まえ、強制的な参加や誘導ではなく、日常的な地域貢献活動が必要であると思いました。

区民会議の中でも、地域における「あいさつ運動」に派生する防犯や防災の運動が紹介されておりますし、区民の皆様も安心・安全のまちづくりに対して高い関心をお持ちであると思いますので、先ほどご紹介した高校生の事例のような土壌を育むことも大切ではないかと思えます。

ありがとうございました。若者の地域参加に関するキーワードになる内容でした。

そのほか、ご発言はありますでしょうか。

私は、2人の子育てをしております。さて、第3分科会において、楽しくなければ参加しないというキーワードがありましたが、親というのは、子どもが楽しめ、喜び事業に参加する共通点がありますので、そのような事業を構築していければよいと思いました。

私は、中央地区の小学校でPTAの会長をしており、第3分科会に参加しました。

子育て世代は、楽しくなければ参加しないとありましたが、「楽しさ」の意味が重要であると思います。にぎやかで笑いながら活動するという意味に取られることもありますが、私の考える「楽しさ」とは、子どもたちのためのやりがいや成果、活動してよかったという達成感こそが、「楽しさ」ではないかと思えます。

参加するきっかけは人それぞれで、消極的に押しつけられた方がたくさんいると思いますし、私が所属するPTAも同じ状況でした。しかし、現在は、来年も引き受けようかという声が増えてきました。おそらく、PTAの活動が目に見える形で子ども

たちや学校、ひいては地域の役に立っていると実感することができたからではないか
と思います。

また、PTAのつながりから、公民館や地域の活動に関するイベントや会議に参加
をさせていただいている中で、多くの地域の方から学校やPTAの運営について支え
られていると感じております。例えば、子どもの数が多く教室が足りない、校庭が狭
いといった課題について、地域の担い手の方から多くの支援をいただき、改善向け
て大きく動き出しております。このように、子育て世代がPTAやそれに伴って地域
活動に参加することで、成果が実感できるような活動を心掛けることが重要である
と思いました。

ありがとうございました。大人にとって「楽しい」とは、笑いが少しずつ深化して
いき、達成感や副次的な効果が活動してよかったと思えるように化けていくことが重
要であり、そのような魅力があれば、子育て世代は参加していくといった力強い発言
をいただきました。

次に、若者の地域参加について考える際、とてもよいヒントになると思いますので、
第2分科会で活動事例を発表していただいた大学生の方から、アルバイトではなく地
域活動を選択した理由や、地域活動を通じたご自身の変化や成長についてお話しだ
けますでしょうか。

第2分科会で桜美林大学 大学祭実行委員会について発表した者です。

実行委員会は、400人規模の組織のため、会社のように担当業務ごとに部署が分
かれております。最初は、学校外の方と交流する渉外担当に所属しましたが、役割だ
から地域活動に参加する程度のものでした。しかし、参加するにつれて、過去に関わ
りを持った多くの大人から、単なる大学祭実行委員会の学生という括りではなく、名
前を覚えていただき、街で出会った時にも気さくに声をかけていただくことが何度も
ありました。また、活動そのものが大学祭を運営する際に役に立ったこともありまし
たので、やりがいがありました。アルバイトと、地域活動のどちらを選択すれば後
悔しないか考えたとき、大学祭の成功や自分の将来に生きる経験ができると思い、地
域活動に力を入れました。

ありがとうございました。次に、和泉短期大学の学生さんはいかがですか。

第2分科会で和泉短期大学の取り組みについて発表した者です。「はっぴい」の活動
に参加したきっかけは、自分の学業である保育実習で感じる不安が軽減されるという

目的でした。しかし、毎月参加して地域の家庭と接するうちに、観察することで子ども
の成長を感じられる、気づくようになったという成長がありました。

ありがとうございました。お2人に共通することは、自分の変化に気づいたこと、
変化に気づくほど大きな成長であったのであろうと感じました。

4 まとめ（コーディネーター）

（1）信頼関係や「自己肯定感」について

- ・信頼関係を構築するためには、定期的に対話を持ち、日頃から信頼しているこ
とを伝えること。
- ・若い世代に何を期待しているか、具体的な内容を伝える。
- ・必ず感謝を伝え、若い世代に「自己肯定感」や地域での存在感を持ってもらう
こと。

（2）「楽しい」について

- ・何かを課せられた参加ではないこと。
- ・さまざまな世代が楽しいと思えることを掘り起し、住みやすい地域をつくるこ
と。
- ・達成感が楽しいにつながっていくこと。

（3）公共性について

- ・自主的に始めた活動であっても、公共性があるものは、地域に還元されるサー
ビスであること。
- ・ささいな活動、日常的な活動であっても、公共的なものとして地域に還元され
ると思うことができると、達成感や地域のより良い変化を期待できるといった、
わくわくする気持ちにつながる。

5 講評

（基調講演者、首都大学東京 都市教養学部都市政策コース教授 和田清美さん）

時間が許す限り3つの分科会に参加させていただきました。熱気にあふれており、
活発な議論を重ねられていたのが印象に残っております。

コミュニティ形成やまちづくりや地域活動について勉強してきた者の視点からする
と、本日の発言やキーワードとなった、自由、興味、やりがい、達成感といった文言

は、これまでの地域活動の到達点であると思います。

「自由」という言葉は、雰囲気的自由さ、制度の自由さなど、いろいろな受けとめ方があると思います。地域活動の側面においては、自発的、自主的で強制力がないこと、すなわち「自ら」ということが重要なポイントであることや、地域コミュニティやその活動は、開放性に満ちた自由度の高い参加、活動を通じて個々の自己実現につながっていくことなどについて、あらためて教えられたと感じております。

この分野を勉強し始めた頃、地域の担い手となる方は、居住年数が長い人ということが重要な条件でありました。しかし、よく考えてみると、居住期間、外国の方、ハンディキャップのある方など多様な人々によって地域は成り立っています。例えば、学生さんのように卒業までの短期間の滞在であったとしても、その期間に自らが積極的に参加することによって得られるところが多いということであるならば、地域コミュニティの側が積極的に受け入れることだと思えます。

雪かきの話にもありましたとおり、地域づくりとは、大上段に構えて何かしなければいけないということではなく、大雪や災害など何かあったときにかかわれる日常的な活動が、そもそもであるということも教えられました。

また、世代間において、信頼があるなかで要望を言い合える関係が地域コミュニティにおいて生まれていることが大切であると思えました。

社会関係、特に地域活動とは、お金で計ることができない、何か数値で出てくるものではないため、我々にとって価値がわかりにくいものです。しかしながら、本日発言していただいたように、区民の皆様の日ごろの活動において、多くの取り組みがなされていることがわかりました。それらを共有し、ともに学び、地域に持ち帰っていただき、生かしていただきたいと思えます。

閉 会

田所中央区区民会議副会長あいさつ

(要旨)

- ・若い世代が参加するためには、「楽しさ」や「強制しない」ということが言われておりますが、ある程度の人数がいなければ活動が成り立たない部分でもあり、難しい課題です。
- ・本日のご意見は、今後の区民会議や「中央区安全・安心と夢・希望のプロジェクト」の

参考にさせていただきます。また、区政においても反映されることを期待しております。

- ・多くのまちづくり会議委員が参加されておられますが、今後もまちづくり会議を通じて区民会議に対し、積極的にご意見をいただきますようお願いいたします。
- ・中央区のシンボルであるJAXAの存続運動をしておりますので、積極的な参加をお願いいたします。

第3期第6回相模原市中央区区民会議 委員出欠席名簿

	氏名	所属等	備考	出欠席
1	井狩 芳子	学識経験者（和泉短期大学）	会長	出席
2	石井 トシ子	相模原市公民館連絡協議会中央区ブロック		出席
3	井上 政市	相模原交通安全協会		欠席
4	浦上 裕史	一般社団法人相模原市観光協会		出席
5	河本 博	大野北地区まちづくり会議		出席
6	木内 哲也	一般社団法人相模原市医師会		出席
7	木村 清	横山地区まちづくり会議		出席
8	坂本 洋三	相模原市地区社会福祉協議会連絡協議会中央区連絡会		欠席
9	佐々木 亮一	公益社団法人相模原青年会議所		出席
10	清水 洋子	相模原市私立保育園園長会		出席
11	代田 昭	中央地区まちづくり会議		出席
12	関戸 丈夫	田名地区まちづくり会議		出席
13	武井 弘吉	小山地区まちづくり会議		出席
14	竹田 幹夫	星が丘地区まちづくり会議		出席
15	田代 明寛	清新地区まちづくり会議		出席
16	田所 昌訓	相模原市自治会連合会	副会長	出席
17	千葉 更男	公募委員		欠席
18	永井 廣子	相模原市立小中学校PTA連絡協議会		出席
19	中西 豊和	相模原市民生委員児童委員協議会		出席
20	長谷川 光義	上溝地区まちづくり会議		欠席
21	久松 伸	学識経験者（麻布大学）		出席
22	平林 清	光が丘地区まちづくり会議		出席
23	本郷 永子	公募委員		欠席
24	宮津 敏信	公募委員		出席
25	横山 房男	相模原商工会議所		出席